

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新刊發賣

民友社編纂

金貨本位之話

定價十錢　郵税二錢

●目次　金貨本位○金銀の割合○價格の尺度○金銀割合の差○物價不動○輸出不減○支那及東洋諸國貿易○外國爲換相塲と商工○金融と公債○形勢と財政と條約改正○複本位○準備金と施行の時機○結局の要領

金貨本位とは如何なるものであるか……これ當時國民の一般に知らんと欲する所の緊要なる問題なり。我社爲に卒先して今や此書を編するに至れるもの。蓋し其急に應じ。其要に給せんとするに外ならず。文躰は尤も平易なる談話躰を用ゐ。比喩亦手近なる實例を擧げ來つて。專ら會得し易からんを期したるもの。故に斯道の專門家たり。政治家たり。實業家たり。官吏たり。學生たるを問はず。一本を座右に供へよ。

●世界經濟上の變動　定價十二錢　郵税二錢

●銀貨之過去現在未來　定價十錢　郵税二錢

右既刊の二書も讀者併せ繙かば得る所あらん

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雨谷一菜庵編　永井鳳僊密譖

少年史譚 第壹篇

阿部仲麿

菊判美製本
定價金六錢
郵稅金二錢

少年諸子の讀物にとて。毎月二回少年史譚を發行するには至れり。其事柄の面白き。其文の匂やかなる。其畫のいと麗はしき。今更いふもくだなるべし。

豫告
第貳篇 阿新丸。（中野三應子編）第參篇 新中納言知盛（雨谷一菜庵編）
第四篇 六代君。（中野三應子編）

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

再版出來發賣廣告

綠亭主人著

清少納言

定價金三拾錢
郵税二錢

大なる二個の女星は、炳焉として王朝の碧落に懸りき、櫻の如き麗姿と、梅の如き清姿とは、双々相映して、爰に幾萬の鬚髯男兒を惱殺せしめたり、櫻の如き紫式部は已に櫻の如き麗筆に依つて、其の姿世に出でぬ、今や梅の如き清少納言は、又梅の如き清筆に依つて、其面影を現はさんとす、――玲瓏たる彼の双眸は如何に鋭敏なりしか――雪の如き彼の双腕は、如何に彤筆を弄したるか――丹花の如き彼の朱唇は、如何に克く謂ひしか――夜深かく紅燈の下、静かに之を繙けば、蘭麝薫じ、美人來るの想ひあるべし、紫式部を讀むものは、必ず清少納言を、讀まざるべからず

●●●讀賣評 本書は王朝文學に於ける二大女星の一人として枕草子の著者として今古の才名を轟かせる清少納言を評論せるものなり清少納言が一條院の皇宮に仕へて香爐峯の雪は如何さありけるに「香爐峯雪撥簾看」の古時を想起して直に御簾を高く卷き上け以て滿殿をして其才華機英に驚殺せしめるは人口に膾炙する所本書は納言が宮中に初參の當時如何に羞恥したる乎其の後如何に發達して遂には意氣軒昂男兒を壓するに至りし乎能く之を盡して又遺憾なきが如し今の閨秀小說家なるもの一讀して深く鑑みなば大に益する所あらん

新刊發賣

少年傳記叢書第四冊第五冊

ネルソン

上卷十錢
下卷八錢
郵税各二錢

ネルソンの父曾てネルソンを評して曰く、此兒如何なる處に置るゝとも必ず能く木の絶頂に攀ぢのぼるべしと。此語眞に當れり。――ネルソン果して如何なる處に置かれたるか――果して能く木の絶頂に達し得たるか――如何にして能く攀ぢのぼりたるか――此書は東洋の英國、吾海國の年少氣鋭なる諸子のためにこれを說き得て親切、平易をを努めたるものと信ず。今回下卷新刊發賣せり乞ふ陸續購讀あらん事を

發兌元
東京市京橋區日吉町四番地
民友社

速記法 自宅獨習生募集

月謝二十錢 二ヶ月卒業

○規則入用者は郵券二錢を投すべし

東京下谷區徒士町二丁目三十番地

速記學專修所

兵營小訓

再版

奥陸軍中將題字　東條陸軍中佐序文

定價十五錢　郵稅四錢

●目次　兵營◎兵役及び兵卒◎兵の任務◎眞兵と軍隊道德◎義務心◎敬意と躰面◎族旗◎軍歌◎日本魂◎勅論拜續の感◎兵氣と質素◎自國と他國◎平和と戰爭◎大日本帝國◎閑暇◎滿期歸鄕

●附錄(一)徴兵令(二)陸軍召集條例(三)陸軍服役條例(四)陸軍武官結婚條例(五)陸軍一等志願心得六(六)陸軍叙勳條例摘要(七)陸軍善行證書附與規則(八)陸軍刑法(摘要)(九)陸軍懲罰令(十)陸軍准士官下士文官採用規則(十一)同上細則(十二)陸軍准士官請願技倆證明書附與規則(十三)祝節參賀參拜等心得(十四)日本郵船株式會社所有滊船乘込手續(十五)陸軍々人私設鐵道採用并に物品搭載手續(十六)赤十字條約(十七)戒嚴令

二版 簡易料理

定價金十錢　郵稅金二錢

二版 玩具と遊戲

定價金十錢　郵稅金二錢

ウェリントン

定價十二錢　郵稅二錢

烏拉山の西、ドーヴァー海峽の東、幾數の王國を併呑し、幾十百の山河を蹂躪し、歐洲の天地を震撼したるコルシカの英雄をして、一敗復た起つと能はざらしめ歐洲の平和を回復したるもの、是れ豈に英國の誇揚たり、大陸の恩人たるウェリントン其人に非らずや。本書は即ち此偉人を傳したるもの、彼が八十餘年の生涯收めて此一卷の裡に在り。幸に一讀を玉へ。

發行所　民友社

東京市京橋區日吉町四番地

青年叢書

一册定價拾貳錢
郵稅貳錢

身高峯に起つ眼千里の觀なからんや。新勝は國運を急變し而して國勢の進轉は國民の資格と伴はざるべからず。國民の資格を高くするの道果して如何、速勝國は大陸大洋の主人たり、一大故鄕を造るの道果して如何。癒ゆべからざる鐵創を頭淸に加へ、新興國として世界の嫉妬と提攜の中心に立てる大日本は武裝せるスパルタに非らずや。國運は新組織を要す。完美なる國民は完美なる個人也、樹を植て一家十年の計を爲す者一國百年の長計は人を造るに在るを忘るべけんや、武育的國民にして高義的市民、時務を知り技術を有せる人、一代の人にして世界の人を造るは一等國の國是、今日の急務也、大なる日本人を造るは大なる日本國を形る唯一の道に非らずや。新人物は新事業を產み、新事業は新國運を開く。學窓の下、西天の一方を睥睨し雄心壯圖を控へし新國民たらんとする人よ『青年叢書』を讀め。

◎第壹卷 武備教育

◎第二卷 遠征

◎第三卷 市民

◎第四卷 職業論

◎第五卷 技術

◎第六卷 學校

◎號外 征塵餘錄（十五錢）

◎號外 本朝美術

以下逐次發行

發行所 東京日吉町 民友社

●家庭叢書（民友社發行）

○家庭の和樂	定價十錢 郵税二錢
○夏の家庭	定價十錢 郵税二錢
○家庭教育	定價十錢 郵税二錢
○小兒養育	定價十錢 郵税二錢
○家庭衛生	定價十錢 郵税二錢
○家政整理	定價十錢 郵税二錢
○社交一斑	定價十錢 郵税二錢

第八卷家庭雜誌合本
自明治廿九年七月至仝年十二月 定價金五十錢 郵税十四錢（家庭雜誌社發行）

第十九卷國民之友合本
自明治廿九年七日至仝年十二月 定價金一圓十錢（量目六百匁）

第一卷極東合本
自一號至十一號 定價金一圓 郵税十八錢

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

成本廣告

徳富猪一郎編
誕生日
久保田米僊畫

定價 上製二十錢 並製十五錢 郵税四錢

久しく品切れの所。成本發賣せり

大石良雄
雨谷一菜庵著◎永井鳳仙插畫

寫眞●萬松山泉岳寺山門
銅版●仝寺內義士墳墓
紙數四百十九頁
定價金參拾五錢
郵税金六錢

發行所 東京市京橋區日吉町 民友社

家庭雜誌
○毎月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵税共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號本局七十番

發行兼編輯人 吉崎圓吉
印刷人 金子佐平

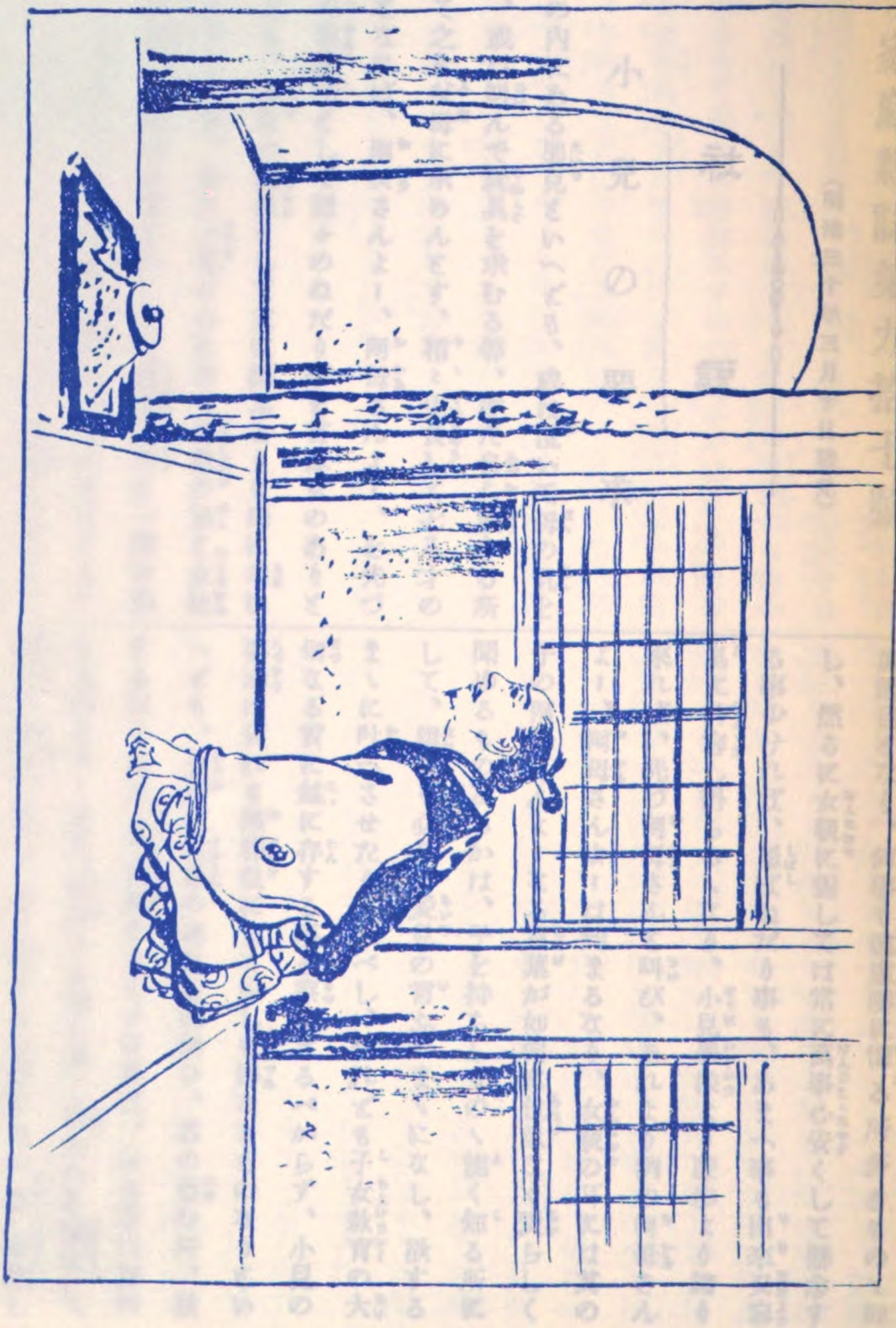
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治三十年三月十日發行

家庭雜誌第九拾七號

目錄



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌第九拾七號

（明治三十年三月十日發兌）

社説

小兒の要求

繈褓の内にある嬰兒といへども、或は泣いて母の乳を請ひ、或は叫んで玩具を求むる等、亦た自ら欲する所ありて之を父母に求めんとす、稍々生長して七八才の小兒となれば、阿父さんよー、阿母さんよー、を先づ請願の前置詞として樣々のねだり事を言ふものありといへども、小兒の通性として父に請ふよりも母に求むる方を多しとす、是れ小兒の心に於て男親の嚴と女親の慈を感じ、即ち男親に對しては親愛以外に一種の恐ろしきものありといふ觀念を感得し、唯だ阿父さんと呼ぶにも阿母さんといふよりは自然に音聲も改まりて眞面目となり、何事も遠慮勝に憚る所多きものゝ如し、然るに女親に對しては常に萬事心安くして懸念する事少ければ、屢ばねだり事も、あまへ事も出來又容易に許容し得らるゝなり、小兒學校より遊歩より歸り來れば、先づ阿母さんと叫び、それより例の阿母さんよー、阿母さんよーは始まるなり、女親の耳には其の子の阿母さんよーなる言葉が如何に仇氣なく愛らしく聞ゆるものなるかは、子を持ちしものゝ能く知る所にして、誰しも必らず愛兒の言ふがまゝになし、欲するまゝに叶へさせたく思ふべし、然れども子女教育の大切なる實に玆に存する事を察せざるべからず、小兒の要求は何れも無邪氣にして少しも罪なきものなりといへども、小兒の性質の異なるに從ひ、其の望む所、欲する所も亦た各々相異するものなれば、此の子は如何なる事を多く望み、如何なる物を多く好むかを推究し、嗜好の善惡を考へ、若し欲する所善ならば益々奬勵し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て其の希欲を高め、若し不善ならば飽までも之を抑へて斯の如き嗜欲の絶滅を計らざるべからず、然るに父母たるもの丶多くは子女の愛に溺れ要求の善悪も顧みず、望むまゝ欲するまゝを小兒に行はしめ、小兒をして何事も我が望は叶ふものなりといふ觀念を起さしめ、從て生長の後までも容易に矯め得られざる我儘と自分勝手の悪習を增長させしめ、悪しきねだり事を制禦するの道を知らず、唯だ小兒のいふがまゝに任じ、父母は恰も子を養育せんとして却て之に支配さるゝ如き狀態に陷り、持て餘しもの、腕白小僧など世間に厭はるゝ子供となし了るもの其例數ふべからず、是れ等しく父母の罪過たりといへども、その罪其責最も母親に重しとす、故に母親たるものは小兒の朝夕己を慕ひ、己に向て泣き、己に向て求め、何事も己れには心安く親近するを思ひて、區々たるねだり事、些少なるあまへ事といへども之を輕視せず、よく／＼注意吟味して抑ゆべきは抑え、勵ますべきは勵まして、家庭の花とも稱すべき愛らしき小兒をして益其美を發揮せしめ、而して以て玲瓏玉の如き人物となし、養育の大任を全ふすべし、吾人が玆に切言する所以は双葉にして其悪習を矯めざれば生長の後斧を用ゐねばならぬ悔あるを知れば也。

科學

麥酒の話

天水生

酒と煙草は衛生に害あり。煙草は「ニコチン」と云へる毒物を含み居れば、之を用ふるは毒煙を吸ふに等し。例令「ニコチン」を含まざるも、新鮮の空氣を吸入して血液を清むべき肺臓の中に不潔の煙を入るゝの害あるとは明かなり。酒の中には「アルコホル」と云へる毒物

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を含み居るが故に、亦健康に宜しからず。酒を飲みて醉ふは「アルコホル」の中毒を起せるなり。勿論其少量は醫藥として用ふる事あれども、此れは衰弱せる時に興奮劑として用ふるに過ぎずして、「モルヒネ」の如き大激藥も極めて少量に用ふれば能く腹痛等を治するに功あるが如く、所謂毒を以て毒を制するの類なれば、決して健康躰に用ふべきものにあらず。且つ酒は啻に衛生に害あるのみならず、之に醉溺せるより、屡々産を破り人倫に戻るの行あるに至る、北海道の「アイヌ」人種が年々減少するは、酒を暴飲する事、其一大原因なりとかや。酒の害亦恐るべし。

然るに此酒なるものは古代より用ひ來りしものにて、人肉を食ふ野蠻人も既に其製法を知れる程なれば、世界萬國行く所として之を飲まざるの人種なし。且つ酒は一種の交際の媒介として、宴席祝會等には必ず之を用ふるの習慣あれば、何分の教育を受けて既に酒の害を知りつゝ、尙之を廢する能はざるもの多し。故に之を憂ふる人には禁酒會なるものを起し、熱心に酒の害を說き、禁酒を勸告するも、因襲の久しき俄かに止むべくもあらず。誠になげかはしき事にこそ。

されば禁酒は到底行はれ難しとせば、せめては「アルコホル」分の少きものを撰びて飲用する時は、何分か其害を防ぐことを得べきか。麥酒は「アルコホル」分の最も少き酒にて、少量の「アルコホル」の外は却て滋養分も含み居れば、之を用ふるも害少し。依りて人々强き酒を止めて此麥酒を飲むに至らんこそ望ましけれ。

玆に不文を顧みず、麥酒の事を書き連ねて、之を紹介せんとするは此微衷に外ならず。讀者其心してよ。

麥酒は名の如く麥にて造れる酒にて其色は茶褐色にして、多少の苦味を帶べども、「アルコホル」分少き爲其味淡泊なり。之を杯につぎて泡立つは、炭酸瓦斯を含めるによる。

釀造法

釀造の法は國々により、釀造所により多少の差あり。之を精く記するは紙面の許さゞる所にして、又徒に讀者の欠伸を招くのみなれば、玆には極めて大畧を掲載するとなしぬ。釀造の順序を大別して三段となす。（一）麥芽の製造、（二）酛の製造、（三）醱酵、即ち是なり。

麥芽の製造　大麥（稀には小麥を用ふる事もあり）は凡そ二三日間水に浸して柔かになし、次に之を暖き温室の内に廣げて、時々掻き廻はす。此時麥は濕氣と温熱との爲めに發芽す。温室の内に置く事七八日乃至十一二日にして、芽の二分程延びしを度とし、之を出して更に熱室に入れて乾かす。始めは攝氏四十度（華氏九十餘度）程の熱室に入れ、少しづゝ温度を高めて一晝夜の後には七十度（攝氏以下之に倣ふ若し之を華氏に改算せんと欲せば



五分の九を乘じ三十二を加ふべし）内外に至らしむ。此間時々掻きまづるなり。之れは乾かすとは云ひながら、半ば焦すなり。かくして出來上りたる麥芽は箱の中に入れて貯藏し、次の酛の製造に用ふ。此れは長く蓄へ置く程宜しく、之に反し麥芽製造に用ふる麥は可成新しきを可とし、昨年のものを今年用ふるを通例とすと云ふ。

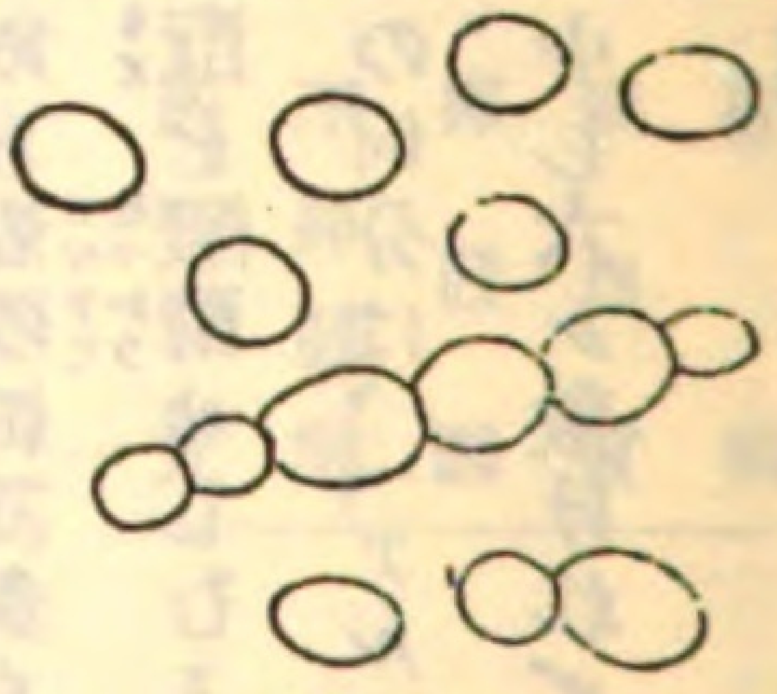
酛の製造　麥芽は搗き碎きて粗き粉となし、（此れには通例器械を用ふ）之を桶の中に入れ、三十五度許の温湯を加へて掻きまぜ、其中何分（二分の一或は三分の一）を銅釜に遷して之を煮沸し、後再び元の桶に返へす。此時桶の中の温度は五十度程に上るべし。後再び其何分を銅釜に遷して煮沸し、又元の桶に遷す。此時は桶中の液は大凡六十度許の温度となるべし。後之を濾過す（通常目の小なる綱を用ふ）濾して出て來りし清澄の液は褐色を帶び、恰も薄き飴湯を飲む

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の感あり。是れ此液中に糖分を含むが故にして、之を煮つむれば飴を得べし。蓋し飴は麥芽より製するものにして、此迄の處は飴の製法と大差なし。次に之に「ホップ」と云へるものを加へて煮沸す。「ホップ」とは Humulus lupulus なる植物の花(白色)を乾せしものにて、「ルプリン」と云へる苦味質を含有す。麥酒に苦味あるは之が爲なり。玆に出來上りたる苦味を帶べる薄き飴汁の如きものは即ち酛なり。

以上述べたる酛の製法は、煎出法と云ひて、多く獨逸に行はるゝ法にて、我邦にても此法を用ふ。此外に冷浸法とて英國等に多く行はるゝ法あり。其れは前法の如く煮沸することなくして、七八十度の温湯中に入れてかきまぜつゝ浸出する法なり。「ホップ」を加へて後煮沸する等の事は同一なりとす。

醱酵　酛を桶の中に入れ釀母を加へて醱酵せしむるなり。釀とは Saccharomyces Cerevisiae と云へる黴菌の一種にして、其形圓形なる單細胞植物なり。圖に示せるは之に顯微鏡を數百倍に郭大せしものにて、其念珠狀に相連結せるは發芽法によりて分列蕃殖せるものなり。(此ものは純粹に培養して販賣す白き粉の如く見ゆ) 此釀母の作用によりて醱酵を起す、即ち「アルコホル」を生ずるなり。此時多少泡立つは炭酸瓦斯の生ずるが爲めなり。かくて大凡二週間を經過せば、麥酒となる。此れ迄を本醱酵と稱し、此れより瓶につめて販賣する迄には、之を密閉したる桶に遷して、一定の時期間貯藏す。此時にも尚醱酵しつゝあるなり。之を後醱酵と云ふ。



(釀母數百倍郭大)

醱酵に二種の法あり。煎出法にて製せし酛なれば、可成低き温度にて之を行ふ。大抵四分五度を以て適温とす、故に夏は氷、冷水を以て冷しつゝ醱酵せしむ。此

法にては釀母は桶底に沈みて、醗酵作用静かなり。冷浸法にて製せし酛なれば、十四度乃至十八度にて醗酵を行はしむ。釀母は液の表面に集り、醗酵盛なり。前者を下醗酵法と云ひ、後者を上醗酵と云ふ。前者にて釀造せし麥酒は「アルコホル」分少くして腐敗の恐又少く、後法にて釀造せしものは「アルコホル」分多く、又腐敗し易きの恐あり。



後醗酵に於ては、下醗酵法なれば一二度、上醗酵法を用ふれば、四五度より上らざる樣にす。此貯藏期限は一定せず。後之を瓶につめて賣出すなり。(通例腐敗を防ぐ後瓶のまゝ百度以上に熱して殺黴して後販賣す)

釀造の化學

麥の成分中大部分を占むるものは澱粉にして、全量の六七十分(百分中)に當れり。麥芽製造の時、温室に入れて發芽せしむれば、麥中の澱粉の何分は「ヂアスターゼ」と云へる醗酵素の作用によりて、糊精及び麥芽糖(一種の砂糖にして麥芽の中に在るが故に此名あり通例菓子等に用ふる砂糖は庶糖と云ふ)に變化す。麥芽を噛めば甘味あるは、麥芽糖の存在せるによる。麥芽を砕き水にて浸出せば、麥芽糖糊精等は水に溶解するが故に水中に浸出す。此時濾過する事により、澱粉の如き不溶解物は取り去られ。褐色の麥芽汁中には糊精麥芽糖等を含む、故に甘し。(飴は麥芽汁を煮つめしものにて多くの麥芽糖を含むが故に甘きなり)酛を醗酵せしむる時は、釀母の作用によりて、麥芽糖の何分は、「アルコホル」と炭酸瓦斯に變化するなり。少し六ヶ敷けれど、化學式にて其反應を示せば左の如し。

$$C_{12}H_{22}O_{11}+H_2O=4C_2H_6O+4CO_2$$
(麥芽糖)(水)(アルコホル)(炭酸瓦斯)

即ち麥芽糖一分に(之に水の一分子加はり)より、四分子の「アルコホル」と四分子の炭酸瓦斯とを生ずる割合なり。糊精も一旦麥芽糖に變化して後、「アルコホル」を生ずべし。

成分

麥酒の成分中最も多量なるは水にして、全量の九十分内外を占む此外に「アルコホル」「糊精、麥芽糖、炭酸瓦斯は主なる成分にして、外に少量の蛋白質、及び酸類苦味質等を含む、

左に掲げたるは我邦にて釀造する三種の麥酒の分析表なり。

(煮沸して炭酸瓦斯を除去したる後に分析せしもの百分數にて示す)

	アサヒビール	キリンビール	エビスビール
「アルコホル」	四・三四二	四・七一五	五・〇一七
麥芽糖	一・五四二	一・五六九	一・七四二
糊精	三・一九〇	二・八五〇	二・三三五
蛋白質	〇・三四三	〇・四六二	〇・六一二
揮發酸	〇・〇一五	〇・〇一六	〇・〇一六
不揮發酸	〇・〇九二	〇・〇一三	〇・〇一三
灰分	〇・一九二	〇・二四九	〇・二五五

次に對照の爲めに、獨、英兩國產の麥酒一種宛の分析表を左に掲ぐべし。

	獨逸麥酒	英國麥酒
「アルコホル」	四・七五	六・七八
麥芽糖	一・五七	五・三五
糊精	三・一五	二・〇九
蛋白質	〇・四〇	〇・四三
揮發酸	〇・〇一	〇・〇四
不揮發酸	〇・一四	〇・二五
灰分色素等	一・八二	一・四〇

以上の分析表によりて見れば、我邦の麥酒はよく獨逸の麥酒に類似せり。是れ釀造法等しきが故なるべし。英國の麥酒は、「アルコホル」の量多し。是れ其釀造法の然らしむる所にして、彼の國にては上醱酵を用ふるが故に、醱酵作用盛にして從て「アルコホル」成生の量

多きなり。

「アルコホル」の分量　前にも述べたる如く麥酒は最も「アルコホル」の量少き酒なり。「アルコホル」の含量は通例四―五分なれど、英國製の强麥酒は六―七分を含み、時としては八分に達するものあり。又獨逸にて弱麥酒と稱するものは、僅かに二―三分を含むに過ぎず。之を他の酒類と比するに、日本酒中「アルコホル」の含量は、十二分より十五、六分に至る、葡萄酒には七八分より十五、六分に達す。其他燒酎「ブランデー」「ホイスキー」等の强き酒に至りては、五、六十分より七八十分に達す。

雛の古句

內裏雛人形天皇の御宇とかや
うまづ女の雛かしつくぞ憐れなる
箱ないでゝうい〱しさや雛夫婦
紙雛を男のたてゝ左みぎ
三條の叔母にもらひし雛哉
雛祭さて美しき女の子
もどかしや雛にむいて小さかづき
ほし店にふるびし雛の夫婦かな
母親のつまゝでありし雛の鼻
雛のだんにかけ上りたる小猫かな

史談

松尾芭蕉が父母

其の字生

徘聖松尾芭蕉が父のことは僅かに人の知れども其母が上に至りては其面影をだにも傳へし書なし。

されば、百歳の後、今にして猶ほ彼れが遺風を奏じ、心を俳林の幽に遊ばすもの、いたづらに彼が世に秀てたることをのみ知り、抑も彼れが如きもの、如何なる母のこれを產し、如何なる母のこれを育て、天禀の美質いよ〱ます〱美ならしめし、更にこれを知るも

のなし。彼れが如き非凡の器、一つに天禀によりて然る處、あへて他をまつて後然るにあらざる、或は知るべからずといへども亦、無果花は必ずや無花果の枝に結ばれ、バラの實は又、バラの花によりて成るを知らば、その彼れが如きもの、母に負ふところ、遺傳によるところの、決して少なからざるや、又た疑ふべからざるなり。

おもひ一旦玆に馳せて、蹤鑿の念いよ／＼深かく、短簡零墨、これに漁ざり、これに求め、僅かにこれを知るを得たり。

たとへば一段の朝霞、朦々たるものを隔てゝ、滿山の花を見やるが如く、しかとも思はれ、又あるはとも疑はれて、我れとわが心、おのづから判然たらざるものさへあり。

されど亦、私かにおもふ、我が漁り得たるところ、決して／＼違はざるべし。此母にして此子あり。殊に彼女は、我が年來の崇拜物、俳聖松尾芭蕉その人が、母として傳へかたるに足るべしと。

玆に於てか、これをいひ、玆に於てか、これを傳ふ。

彼女、氏は桃地（百司、或は百々地といひたへたるなど、いづれも共に誤なり）名は路女とて、伊豫宇和島の士人、桃地平馬が長女なり。

父なる桃地平馬は、尤も劍道の術にすぐれ、人の用ひも甚だ重く、主公の覺へも芽出度かりしを、計らずも或もの丶讒によりて一朝君の御前をはなれ、長子何某は又君の心の解けなん日には、よく／＼取たて給はるべしと、緣者のもとにこれを托し、自からは長女路女のみを携さへ、僅かなる由緣により、住馴れし地をさりて、伊賀の上野に移り住めり。

上野の城下、赤坂町といへる處に小さゝやなる町道場を立てゝ門下を集め、日夜劍法を授けて玆に不遇の年を送り、又も不遇の年をむかへぬ。

其頃同じ赤坂の町に、筆道指南の門を張り、かたわら、醫を持て立てるものあり。松尾與左衛門といふ、もと本國拓植の人、近ごろ此處に移りしものなり。性質順良にして寡言温和、誠に人の師表たるに、欠けたる處一つもなし。平馬いつしかに此人と互ひに見知りあふ中となり、日ごと夜ごと、互ひに往來していよ／＼深かく、いよ／＼睦しく交はりたりけり。此時平馬はすてに頒白、與左衛門はいまだ而立の年にも達せず。さるを彼れの老いてます／＼壯なると、これの若くして着實なるとは、意氣の互ひに投合して、誠によき語り相手なりけるよし、隨筆の記者、我れに敎ゆ。

頒白童顏の士と、靑壯着の人と、兩に相携へて花陰ゆるく歩み、甲乙相對して爐邊共に座し、彼れ語れば、是れ答へ、是れいへば、彼れ應し、嬉ゝともに／＼春の日の永きも忘れ、又秋の夜のふくるも知らで、如何に樂しくありけるぞ、思ふて玆に到る時は、机邊惚として我れ毎ねに彼等が幻影を見る。

交誼斯くの如くいよ／＼深く、平馬の彼れを子として見る、與左衛門の彼れを父として見る、遂ひに事實とは成るに到れり。

平馬は、八方の求婚、或は金を以て驕り又は、位地を以ていふもの、皆こと〴〵くこれを退ぞけ、其最愛の長女路女を以て、松尾與左衛門に許し與へり。

琴瑟尤も相和して、三男、一女、彼等か間に生れたり。然して、我か松尾芭蕉翁は、そが三男の中の末子、幼名を金作といひしものなり。

然して其金作を名づけしは、桃地氏の先代に、金之丞とて、よろづにすぐれし人ありしを、慕ふて然かせしもの、全たくに慈母路女が意なりと。

これ實に未だ盡さず、たゞ其一斑をいふのみなり、松尾芭蕉が母の素性。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然り而して、其性質は如何といふに、賦にすぐれて物にさとく女の道の一通り、縫針諸禮のさま〳〵より、讀書の上にさへもやゝ達し、殊に和歌に巧みなりし。

然かも、麗質玉の如く、才色兼備はりて、類ひなかりし。さるに尤も温和にして、よろづの事に、おとなしく、才に驕り、色にほこるなど其あと、一つもなかりしとぞ。

されば、平馬が、國に殘せし長子にもかへ、いとも深くこれを愛せし、又尤もとも思はるなり。

斯くも秘藏の愛娘を以てこれに許せる、與左衛門が性行、平馬漸々其好む處に偏せしもの或はなきにあらざるも、亦々これによりて、察すべし、そのなみ〳〵の人ならさりしを。

孟光伯鸞の交はり、子は皆父に似てさかしく母に似て又温和なり、然して金作尤も然り、七歳の時、

春風に手をひろげたる梅の花

といふ初吟あり。幼兒の初吟元より、定規を以て正すべからさるとはいへども、卵中鳳雛の一聲、いかに珍として傳へざるべき。

父も喜び、母も喜び、我が子の吟よと驕りしを、平馬の尤もこれを喜び、よき短冊を求め來たり、にじり書きにこれをかゝせて遥かに、これを國なる緣邊の方に送り、孫金作が吟なりと大ひに驕り示せしとぞ。

猶々幼年の逸事などこれを穿鑿していへば多し。

文藝

田園雜興（一）

不二行者

鷄

家禽の飼養は、家庭の一樂。彼も山家に猗頓の昔を志

のぶにはあらねど、鷄多く飼ひて、之を伴侶とも語らふに、自然の意思ともいふべきもの、其鷄どもの行動に顯はれて、そが樂しさはいはん方なし。公冶長が鳥の語を解し、米國の某が、鷄と語りたりといへる新聞のありけるも理なりや。

東都の四谷あたり某の家禽場より筺に藏められたる數箇の鷄卵は、小包郵便の便を借て、彼の家に持ち來られぬ。それをば彼の家に嘗てより飼ひおかれし地鷄のカシハの雌に擁かせ、二十の日滿ちて、美しき雛鷄は世に出でたり。

彼等は殼裡既に廣き世界に通ふべき細やかなる聲を發ち、われから其世を隔てたる薄き卵殼を劈きて、温かき母鷄の腹毛の下に藏れ、少時の休息の間に濡れたる細毛の乾くと共に、兩脚蹌踉きつゝ、初めて母鷄の腹羽裡より、珍らしげに訝かしげに、廣き世界を眺め、直ちに先づ試むるは、剝啄なり。初めの程は同胞のおかしげなる趾をば、食ふべきものと思ふ如く、短き觜をもて嚙みつゝ引くに、他は驚き惶て急ぎまた母鷄の腹下に潛む。或はおのれの出せる汚物をも、なほ餌ならんとて啄み、そが口にすべからざるを知りて、嘴を左右に振りつゝ、柔かき藁の褥に拭ふなり。

絹絨の如く柔かなる滿身の羽毛に、脚高に裳褰げたらんやうなる態して、母鷄の懷に隱れつ見えつすること三十日經し頃。母鷄はやがて彼等を空しく塒に遺して去りぬ。かれ等は今家とも褥ともはた枕とも賴みたる便の床を失ひぬ。一日二日は寂しさに堪えかねけん、同胞諸共に高く哀れなる叫聲を擧げて、懷しき母を呼ばへど、母鷄は竟に聲だに聽かせざりき。

かくてかれ等は、主人の弟の工夫に依りて、横二尺縦四尺許なる小さき塒の屋根に、明窓のつきたる小屋に入れられつ、哀れに叫ぶ時、主が持て來る粟、生麥或は小さき蟲なんどに親なつかしき事も忘れつ、腹滿つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る程に、靜に互に重なりあひて、穩かなる夢を結ぶ。醒めてまた親なつかしく叫べば、主來りて餌を給ふ。

かくして日暮るゝ際、前の夜まで暖かき羽毛の夜具に包まれしを今夜は如何にして過すべきと思ふさまに彷徨く。小屋の奥の小暗き方に、いと暖かき白き綿羊の毛裘垂れたり。彼等の一個は覺束なくも、恐る／＼潜りゆきて。見るに、いとよき寢處なるを喜びて、そがまゝ出でゝも來らず、他のもの訝りてまた同じく窺ひよりつ、はては次第に集りて、竟に罪なき夢をば重ねたり。毛裘は綿羊の毛皮を綴りあはせて低く吊天井となせるなり。板敷には柔かく細かなる灰と沙とを厚く敷きつめたるなり。

初三の月淡として黄昏の光を投げ、暮夜の烟やう／＼籠むる處、その小さき棲居を明窓より窺へば、夢より淡き月の光、板際より忍びやかに、圓き團欒を照すに浴して細々たる微音をなすを聽き得べし。靈空杳渺たる際より、靜に下界に降るの天使が、寂寞の裡に偶語するが如き幽妙なる韻あるを感ずべし。

あはれ光を衣の如くにまとひ、天を幕の如くに張り、水の流にその殿の棟梁をおき、山の裡にその宮の柱石を据ゑ雲を車となし風の翼にのり、泉を谷に湧かして野の獸の渇を療し、果を林に實らして空の鳥の飢にあつる眞宰の造化は、またなほ此小さきもの、上にも、その恩寵を降しけるよ。

誠に彼等の細々たる私語は、眞宰の與へし一日の行樂に嬉々靜夜の夢結ばんとするに臨みて、永朝永夕限なき宇宙の榮光を讃稱へんとする乎。喧しき晝の人間に在ては竟に聽くべからざる、蒼天の崇高なる稜威の消息を語らんとする乎。

一日また一日、宇宙眞宰の仕育は、漸くかれ等を發達せしめ、やがて母鷄も要なくなりて、その小さき棲居より出づるの自由を與へられ、竹格子環らしたる廣や

かなる範圍に遊び、梢の陰、敷石の邊、悠々嘻々として逍遙するに至り、漸く大きくなりて雄鷄は花の冠美しく鞍羽麗しく飾られ、雌もまた自ら身躰つくりて、一箇の鷄社會の大人となれり。

灰色せる羽に斑紋の細かに點じたるもの。冠の單瓣の花の如く躰羽白くして頸毛鞍羽の金銀絲拖きたる如きもの。黄羽滿身、黒の斑點鮮やかに肥えふくだみ、腹のあたり圓やかに脂つき、脚短かく歩むに重げなるもの。鶴の如く白く、頭より頸かけて、黒線一條拖きたるもの。薔薇冠なるもの。茶褐色なるもの。其聲笛の如きもの。簫の如きもの等。各其祖先の遺傳をば、躰度行動に表はしたる疇昔まで徑寸に足らざる卵中のものなることを思へば、また奇しきものなりける。

かれ等は自由を喜ぶ。竹園の裡やがて羈束を感じて廣らかなる天地に逍遙す。かれ等は自衛を知る。颯と空ゆく鷹鳶の影を仰いで、一齊に警戒の聲を擧ぐ。朝に夕に餌與ふ主に親めるほどに、かれ等は眞にその動物的野性を離れて、宛然有情なる人の如く化せるに似たり。定められたる餌の小桶を擧げて、口笛を吹くとき、梢の陰、籬の下に群れたるが、遽に色めき動搖めき飛び、舞ひ躍り、鳴きて、彩帽したる競走者の、號鈴に馳する如く、歩卒の喇叭を聞きて急進する如く、細き脚に地を踏む音、自からなる調をなし、凰擁し來りて、一齊に花冠を昂げ、彩紐を振ひつゝ仰ぎ見る。

好餌はかれ等の腹を充せり。三々五々相伴ふて、東隅西隅羽蟲を捕り細嘴を磨ぐ。臥せるあり、佇むあり、横はるあり、悠々たる自得の狀、如何に彼等は自然の賦したる其境界に滿足せるよ。

うら〳〵のどけき春の日、桃、櫻、杏、李の樹下、さゝら小川の流靜に落花をのせて往く處、霞に浴して雍々たるかれ等の長閑なる逍遙遊に伴はんか。綠色凝る夏木立の梢の陰に去來して、柑花に唸る氣うとき虻

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の聲聽くが如く。頸かたげ、或は蜻蜓を追て行方失ひたるに茫然佇立みたる彼等の閑境界に隨はんか。露に起臥す萩の叢に蟋蟀をもとめ、霜にあつでへたる圃に蚯蚓をあさり、さては滿目皎々たる雪の朝、聲朗らかに高く鳴くなる、かれ等の行止を學ばんか。

草廬の主たる「彼」は雞と伴侶とし朋友とせり。自然の悠遠なる消息は、彼等を通じて聽くを得べし。家庭の快樂ある趣味も彼等に依りて喫するを得べし。

「彼」今靜夜都門の紅塵深き巷の一屋に臥して、遙に彼等親しき鷄群を憶ふ時、昂然として冠を戴きたる姿容、藹然として餌に思を傾けたる態度を觀、家庭の和樂を讃すべき凱歌高く呼ばふ聲を聽く。かれ等今はその兒孫を有し親族を有し、老翁老婆を有し、叔姪を有し、さながら一家庭を形成しもて長へに「かれ」の草廬の家庭の伴侶となりつゝあらん。

(雞完)

雨後の鶯

秋葉女史

終日つれなう降りしきりける春雨に園の白梅もいとわびしげにたゞずめり今は鶯も來つゝなかねば香をはなたんにも心なしとかこち顏に見へけるがいつしか雨もなごりなく晴れわたり常よりはひとしほ豊にてりそふ西日のうら／＼と枝におく白露も輝きていとうるはしく色どるなり。早や此日も暮ぬる悲しさに今ひとたび鶯の長閑に打いでたらんにはいかにうれしからんとまちわびぬるに梅も心のひとしくてや笑みをたゝへてとび來るかたのみ眺めつゝあり、かくまちわびぬる身を知るや知らずや鶯は今までの雨をいづこにしのぎけん空高くとび來て梅が枝に止り愛らしきくちひらくよと見るまにほけきようのひとこゑは雨の後とてひとしほうるはしくさへわたりければ梅もうれしくや思ひけん床しき香をいやたかくはなちければなゝめにさしこむ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夕日のかげもいとめでたくてこよなうなつかしう覺えてなん

春雨になやめる梅をしたひてや
一聲たかく鶯のなく

春十二句　みれ女

京女郎の頭美くし若菜つみ
色黒し田にしの苔の二年ごし
菜種さく中にむしろの芝居小屋
馬のはらくゞりぬけたる燕かな
手を出せば舩からさゝぐ柳かな
ふみ切りを越へてむかふに桃の花
春の雪柳の上にちいらちら
ちいらちらちいらちら〱花の散る
山寺に三かゝへ半のさくらかな
公園の雨や花あり柳あり
蝶々の影やごしたる流れかな
鶯の朝に來なくうらのやぶ

小説

貧書生　八朶山人

(上)

氷川の杜の傍に、青々として杉の生垣を結ひ廻した、一際目立つ古風の家がある、杉垣の上からは紅い白い花が色麗しく咲き揃つた枝を差出して、惜みげもなくかんばしい香を外にこぼして、春は此家ばかりだといふ様に、澤山の梅が見事に咲き誇つて居るので、此の前を通る時は帽子を冠つたものも半天着も袖引き止めらるゝ様な心地に成つて、耳を何やらの初音に傾けて暫し行きかけた足を止め無いものはない、そして生垣の南の端に立派の冠木門が立つて其の門柱には御家流の優しい手跡で薫風舍と書いたちと大振な札を掲げら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れてある、されば私立の女學校でもあらうか、毎日二十人許の女の子が集まつて居て、朗かに咿唔聲、やさしく唱歌する聲なぞが折々杉垣の隙を漏て聞こゆる事がある。

今しも福吉町の方から駈け來て、此家に這入つた男、身には外套を纏ひ頭は深く頭巾で蔽し足には草鞋を穿き、肩にヅックの革抱を掛けて居る、此男は新聞配達で、銀坐の何とやらいふ書肆から、毎朝必ず八時頃には此家に一枚の新聞を置いて往く、身裝の變手古で可笑しいといふので此の男の玄關に來るのを見ると數多の女生等が寄合つて色々と評を始る、それは勿論譽めるでも毀すでもなくが、たゞ風采か可笑しいといふので不思議かつてつい笑ふので、生徒等は度々塾主の小言を聞くことも有る位だ。

だが實に此男の風采の可笑さと言つたら一通や二通で話し盡せない、柳原から小供外套の着古でも買つて來て、それに少許修復をして貰つたかと思ふ樣な古びて汚穢じみた外套を着て居る、其許では別に笑ふほどの事も無いが、魚屋も豆腐屋も寒い日なぞには丁度同じ樣な外套を來て來る事もある、だが此男の着て來るのが獨可笑しいといふのは、外套が小さくて躰軀に釣合はないからなのだ、其の丈は僅に足の膝の遙か上で袖は漸く臂までですに止まり、胸は狹い故か全然米俵の樣に丸く固く括られて居る、だから外套を着たといふよりは寧ろ嵌めたといふ方が適當して居るらしい、下の外套は斯程に狹苦しく窮屈なのに引代へ、上の頭巾はぶく／＼する程の大袋で、それが前にかぶさり後に垂れたりして少刻も頭上にぢつとして居ないのをやう／＼手拭を紐にして首に括着けて帽子を戴かない故と見え、頭巾の形が烏賊の頭の樣にならないで章魚坊主の樣に丸くなつてゐる、そして外套が短かいので腰の裂目が歩く度に臀部の四方に擴がつたり、其卷きつ

いたり、實に可笑しいから、全然黒い消防火の持つ纒の樣だ、だが本人は平氣と見え毎日此の服裝で新聞を持つて來る、此家で取り始めたのは去年の十月、それから今といふものは始終此の不思議の外套を着た男が來る、何時も同じ裝服で一度も變つた事が無い、始の内は雨が降るからだとも思つた、寒いからだとも思つた、けれど十月から、今日迄四月の間には隨分天氣の日も暖かい日もあつたが、此の男は一度も此服裝を改めた事がない、一回も頭巾を外した事さへ無いのである、頭巾の鈕釦が取れて居るのを見て此家の老婢が親切にも一寸着けてやらうと度々勸めたけれど、それをも辭して往つて仕舞つた、全躰彼は何て有らう?。

塾主と見ゆる年頃五十四五の品の善い老女、今しも彼が新聞を置いて立ち去らうとするを見止め「あの新聞屋さん、一寸待つて御呉れ」と呼止めた「ハイ、何か御用で」と纒のやうな躰は急に止まつて老女の方を振向いて言つた「あの昨日の新聞にお前店の廣告に載つてた、婦女文庫一號を一部買つて見たいが、あの定價通りかね」と老女は問ふた、彼はさもうるさい、面倒くさいといふ面色で「さうですね、明日次手に聞いて參りましやう」と言ひながら早脚に行かんとして二三歩進み出した、老女はあはたゞしく兩手を差出し「ま、まア御待ち、お前には實に御氣の毒だが、何れ御禮するから一寸往て持つて來て御呉れでないか、代はいくらでも善い、後で上るから」と頼んだ「明日ぢやいけませんか」といふ彼の言葉に、老女はちよと考へ「今日是非要るので實はお前の來るのを待つて居たんだから、厄介だらうが一寸往て來て御呉れな、これ程願むぢや無いか」と言へば、彼はさも困つたらしく見えて、急に首を打垂れ「困りましたね、どうも」と佝ほ引うけ難い樣子で呟いた、老女は掛けたるツヽクの内を覗いて「お前、もう、其中にやあ新聞は一枚も無いぢやあない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かい、もう配つて仕舞つたんだらうね、どうせこれから店へ歸るんなら持つて來て呉れても善いぢやないか、後生だからね、お前の都合が悪けりや直ぐで無くとも今日中でさへあれば善いから、是非左樣して貰いたいね」と言ふ退引ならない老女の頼に彼は困じ果て暫時默然として考へて居たが、何思つたか急に括つた手拭を解き頭巾を外さうとするのを見て老女は「お前、左樣して御呉れかい、何故頭巾を御取りだえ、寒いから其のまゝで善いぢやないかね」と笑つて言へば、彼は頭巾を後に跳ね顔を差出して老女を眺めたが、躰面悪氣に下を向いて「あの、小生は實はその、何です、こんな服裝して御恥かしいですが、實は書生です、芝の山内に遊學して居ます生徒で御坐います、これから飯倉町の下宿屋に寄つて着物を着替へまして學校に參らんければなりません、それで折角の御依頼を御斷り申したんですどうぞ悪からず思つてください、小生の今の境涯餘り面目無さに人に知らるを恥ぢまして、飽まで面をつゝんで今日まで外した事の無い此の外套、貴女の餘儀ない御言葉に據處なく御覧の通り恥辱を打散けたので御坐います」と顔を眞赤にして少し聲を震はして言つた、老女はこれはと許り驚いて暫し彼の顔を見詰めて居つたが、見れば賤しからず逞しい男子の相格、學費に窮しての今の境遇であるか、人目に恥を包むの外套であつたか、親の仕送る學費を入らざる方に失ふ者さへ有る世に、是は身を粉にして其志を貫んとする天晴見上た心平生から老婦も通常の配達では在まいと噂をして居た通で深く感じ入ッた樣子で「左樣でしたか、それはまあ、嘸ぞかし御難儀の御身の上、今迄薩張存知まんものでしたから、とんだ失禮許り申しましたよ、矢張店の屋どんだとばかし思つて居たものですから、あんな御無理も願つたんです、さういふ譯なら、なに雜誌は婆やでも取に遣りましよ、でもまあよく御

身分を明して下すつた、そして不及ながら此後は御力添も致しましやう、毎日新聞配達を爲さらないでも何か外に…、まあ、御上んなさい、婆や御坐敷を掃除して御呉れ」と言つて彼を奥の間に招ぜんとした、「難有う御坐いますが、時間に遲刻致しますから、これで御免を蒙ります」と丁寧に辭儀してその厚意を謝した、老女も彼は猶豫の出來ない大切な日課を目前に控へ居るを知つたから、强て止むることもならず「では明後日の日曜日は御休でしやうから是非御話に御出で下さい」と言へば、彼は「日曜日は却て閑が御坐いません、失敬致します」と飾氣のない露骨な言葉にて答へ、再び頭巾を被つた、「ほゝ、可笑な事をいふ人、日曜に閑が無い



と、そんなこと言はずに入らしやいな」と言つて彼の去り行く方を見送れば、麻布の方へと軈て可怪な外套

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の影は見えなくなつて仕舞つた。

（下）

此事が有つてから、老女頻に彼の志を誉めて〳〵ほめぬいて、えらい者、拔群たもの、感心な者なぞと言つて、老婢とは勿論、あらゆる知己にまで風聴した、女生等も此事を先生より話されてからは自ら笑つた事を後悔し、その翌日彼がこつそり新聞を置いて行くを逸早く見附けた時は、何となく氣高い樣にも見え、傍に駈け寄りて頭巾の間から顔を覗かうとしたものも有つた位である。

翌々日曜日の早朝、玄關に人の來る氣勢して御免と音なう者があつた、老婢はあわてて障子押開き何誰樣と迎へたけれど、今迄つひぞ見たことの無い立派な若い男で、身にはヘルの洋服を着け、そしてどこやらの徽章のついた帽子を右手に取てニコ〳〵笑ひながら挨拶するけれど、老婢は誰だかと氣附かないで再び「貴下は何誰樣です」と問へば、「御忘れなすちやあ困ります、私は何時も參る新聞屋で御坐います」と笑つて答へた、老婢は急にきまりが悪くなつて「オヤ、左樣で御坐いますか、私としたことがつひ御見違申してとんだ失禮しました、さ、御上んなさいまし先生も先刻から御待ち申して居たので御坐いますよ」と言つて彼を客間に導いた、急ぐに布團や煙草盆を薦めて、その度每に善く見れば成程風姿格構が昨日まで外套を着て來た人に相違はない、だがどうもまだ不審の躰であつた、恐く彼の眞顔と誠の姿を見たは今日が始めてゞあらうから、老婢がかやうに迷つたのも決して無理では無い。

程なく微笑を浮べて老顔にこやかの塾主の女、靜かに出で來て、人待顔に端然と正座した彼の前に席を占め、互に私は此家の主人梅野しげといふもの、小生は豐後の産にて植田豊吉といふもの、以後は宜敷と初對面の挨拶を取換はし、」時候の辭儀も濟めば、老女は「よく

御出で下さいました、今日は御休暇でせうから何卒御ゆつくりなすつて下さい」と言ひさし老婢が此時持ち出でた茶を注ぎながら「よくまあ、それでも新聞配達なぞをなさいます、さぞ御骨が折れる事で御坐いましやう」と言へば「始の内は隨分辛う御坐いましたが、なあに馴れて見ますと左程にも感じません、だが時間を費すには閉口します」と答へて、老女が差し出す茶碗を會釋して兩手に受けた、老女は倚ほも語を次ぎ「私も貴下の樣な御心懸の人は此年まで見たことが御坐いません、誠に貴下には感服致しまして婆やとも御噂申すので御坐いますよ、そして今迄には嘸種々の苦勞をなすつた事でしやうね、ですが艱難は人を玉にするとか申しますれば將來に幸福は屹度貴下を待つて居ります、そして御成功は必ず此の私が御請合ひ申します」と言へば、彼はその老顏を眺め「御恥かしい新聞配達如き境涯になりさがつた小生をそんなに御譽め下さると却つて慚愧に堪えられません、唯だ小生は成功を望む許に如何な苦勞もして見やうといふ決心で御坐いまして、これまで國許よりも度々學費を送らうの、小遣をやらうのつて手紙をよこしましたとも有りました、ですから樂に修業をしやうと思へば出來ないことも無いですけれど、どうも小生の性質として兩親が粒々辛苦の餘を貪りますのは甚だ快くないので、どんなに刻苦をしても飽まで自力を以て素志を貫きたい量見で御坐います」と屹と成つて言つた、老女は益々感に入り「それが他人に出來ない事で、實に貴下は書生いえ青年の龜鑑で御坐います、貴下の前では御坐いますが、此頃の書生の風儀の惡く成つたことはどうも申し樣も御坐いません、一心を勉強に籠むるなぞといふ眞の書生は十中八九どころか、有の儘申せば恐く貴下方より外には御坐いますまい、決してこれは御世辭では無いので、まあ大抵の書生を御覽なさい、國からどん／＼

金を送らして、それを十分の一も肝腎な學問の方へは遣はないで、口に許り立派な事を言つても、寄席とか又外の事につかつてしまひます、誠に心外です………私なんぞが何程氣を揉んでも年寄ではありますし、女ではありますし、まあ椽の下の力持で致し樣も御坐いませんが、貴下なぞは御若いから十分奮つて御仲間を導きなさいと熱誠面に顯はれて言つた「否、どうして私なぞにそれ程の力は御坐いません、ですが今仰つた通りの狀況ですから、社會より我々は蛇蝎の樣に思はれ、唯だ書生と聞いた許で震慄する位嫌はれて居るのです、それを思ふと何時も小生は殘念で殘念で堪りません」と彼も赤心を吐露して答へ、腕拱いて考へ込めば、老女も吐息をつくのみで暫時の間室内寂然であつたが、忽ち沈默を破つて「こんな事を突然申上げては甚だ失禮では御坐いますが、新聞配をなすつて貴重の時間を御費しなさるのは、貴下の爲に實に惜しい事だし、且つは出來る丈の御世話もして上げたい心ろですが、どうでしやう宅に御出なすつて御勉强なさいましては、若しもさふして戴くと宅も無人ですから賑になつて丁度宜しう御坐いますが、なに食費なぞは御心配はいりません、御閑の節にでも生徒に講義を御聞かし下されば大變私も助かります、是非どうかさうなさいましな」といふ信ある實ある老女の言葉に、彼は深く感激して頓には是非の答もなり難く、唯だ默然として居つたが少時して「難有う、その御厚意はけ、決して忘れません、永く貴女の御名前は記臆致します、實に難有いです、數にも漏れた此の身をそれほど御思ひ下さる貴女の御志、膽に銘じますですがどうも折角の御思召を御斷り申さんければなりません、何故となれば今迄小生が兩親に對し、朋友に對し誓つた主義約束を反古にしなければなりませんから、此事ばかりはどうぞ惡からず御推察願ます」と斷然言ひ切つて「今日

は上野の書籍館に參らんければなりませんから、これで御暇致します、何れ又」と辭儀して立ち上る、老女はます〳〵氣高い志に、天晴丈夫の決心動かすべからざるを察し、已なく起つて玄關に彼を見送つた、彼は「でも、よく御考へなすつた上是非さうなさいな」と勸むる老女の言葉を脊に受け「失敬」と言ひつゝ玄關前の敷石を二ッ三ッ踏み跨いだが、塀際に生ひ立つ蕾の堅い豐後梅を眺め、何か感ずるあるかの如く急に止つて老女を見返へり「これは實に善ひ梅です、早咲をしないで十分霜雪に逢ふた方が却つて好いかも知れません、花が咲きましたら嘸奇麗でせう、その頃は拜見に參りたいものです」と意味有氣な言葉を又來ん時の紀念と殘して、此家を立ち去つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

その翌日から彼の新聞配達は來ない、十日經てども二十日過てども彼はその身を耻ぢてか又は外に何か感ずる所有つてか再び此家に來ない、玄關際の豐後梅は滿開と成つたが、賞めて行つた彼の影は再び見られなくなつた。

談叢

一擊の下に七人

湖處子

一村雨の名殘涼しきある夏の朝、裁縫師は例日のやうに風通のよい窓の下で、吃々と針を運ばせて居りました。をりから、唐辛子、唐辛子、七色唐辛子。と皺枯た聲も涼風に威勢よく、表大路を賣りあるくものがありますので、固より好物のとでありますから、裁縫師は裁ちかけたものを投げ捨てゝ早速唐辛子屋を呼び入れました。

婆さん婆さん唐辛子少し貰いましやう、

お呼びなされたはこなた樣、へいへい誠に有がたう存じます、如何程差し上げましやう。

と婆はいそ〳〵と箱の蓋をとりますと、鼻を刳ぐる樣な香がプン〳〵としますので、裁縫師はもう夢中になつて、

いやこいつァ極上だ、實は五厘で濟す筈であつたがもう五厘きばつて一錢だけ貰うとしやう、

一錢と聞いて婆は少し豫算が外れましたが、これでも賣らぬよりいくらか利益でありますから喜んで置て行きました。後に裁縫師は

へゝ難有な、これさへあれや、どれだけ家業に勵がつくか知れぬ、昨日半日を晝寐に涙費したのも全くこれを食はなかつた以所だ、して見と辛子と云ふ奴お難有ものだな、どれどれ早速いたゞきましやう。

縫裁師は急ぎ膳ごしらへをして朝飯にかゝりました。先づ何より先に味噌汁の熱いのに唐辛子一摘をいれて、掻きまはして、押戴て、一口飲みました。御覧なさい、この男何か電氣でも感じたやうに、忽ち鼻をヒリヽと蹙めたした。眼から涙がほろ〳〵と出て汁腕の中にこぼれました。

アッァ好味、好味、人は酒々といふが己にはこれでなくちやお夜が明けぬわい。

辛子は汁の湯氣と共に一室のうちをプン〳〵と香ります。その匂を嗅ぎつけて、蒼蠅の奴が諸方より同士を呼び集へて雲霞の如く攻め寄せて來ました。裁縫師も今は耐らず大音聲に

畜生め、誰れが貴樣等を呼んだ、早く逃げ居らぬと命がないぞ。

と怒鳴りましたが蠅は一向無神經で、それを怖しとも恐しとも思はぬのみか、拂へば拂ふほど益々大擧して眼と云はず鼻と云はす遠慮會釋もなく甞め散らかす傍若無人の擧動に、裁縫師は烈火の如くに怒り

畜生、人を馬鹿にしあがる、どうするか見あがれ。

と大喝し柱に掛けたる長刀ではない箒おつとり、眞向上段に搆へしは凄じとも勇々しとも言語に絶し、有樣でありました。

やがて隙をや見たりけむ、いゝゝ、エイヤオ、と掛聲勇ましく打おろしたる箒の下、憐むべし七足の蠅は全潰れ、枕を並べて斃れました。

ヤ、これはいかなこと、たゞ一撃の下に七足！我ながら驚き入たる手錬、己はこんな利腕であつたか、己はこんなに豪傑であつたか、へゝゝこれでは天下に怖いものはないぞ、それはさうと、どうかこの腕前を國中に知らせてやりたいな、いや世界中に見せてやりたいものだ。

自惚と野心とに驅られて裁縫師は殊勝にも武者修業と出掛けました。

さて手荷物といつては今まで飼ひならしていた繡眼兒一羽と腰に一つの札をさげたばかり、旅裝も至極輕らかに、なれし故鄕を後に見捨て、行くほどに行くほどに、いつしかとある山路にかゝりました。いよ〱絶頂に登りつめたとき雲つくばかりの巨人に出會しました。

大膽なる裁縫師不眄不臆、

やア大將今日は、時にこの山から見晴した處では世界はたゞの一目、風呂敷廣さもないが、その中には雜多の人間が虱の樣に蠢々と沸て居る、この虱の奴等を踏み潰してやるのも何と愉快では御坐らぬか。

こいつ豆のやうな身體をしながら生意氣なことをぬかし居ると巨人は嘲笑ながら、

へゝ小僧何をぬかす、

おつと待つた、そう小僧とばかりけなされな、これでも天下の豪傑で御坐るぞ、その證憑はこれを、これを、

と例の腰につけたる札を示せる、
巨人はぢつと讀んで、
ム、一擧のもとに七人を斃したる大豪傑となりしそれほどの豪傑ならば、よもやこれが出來ぬはあるまい、
と云ひさまに雪達磨のやうな石を輕々とひッ攫んで空中に向て投げつけますと流石の大石粟の樣に小なくなつて遙かの谷底に墮ちました。
何んの、何んの、その位なことは屁でもないと、いざ我手錬を見參にいれん、貴殿の石は谷底に落ちたれど、拙者の投げたる石は一たび空中に揚るときは、決して落つるとなし。そうれ眞向の通り、
と懷より彼の繡眼兒を放ちますと、鳥は自由の天地に復りたるか嬉れしさに、一たびは高く一たびは下く、あれ〳〵と見る中、雲の中に消えて仕舞ました。
イヤ成程こいつあ人間業じや出來ぬわい
巨人はしきりに感嘆いたしましたが
イヤイヤまだ如何ほどの力を有つているかそれを試ないうちはなか〳〵承知は出來ぬぞ、幸ひこの樫樹を遙うの森まで擔くからその分擔をしろ。
おつと承知だ、そこで根の方は輕くて枝の方は重いと、拙者は重い方を擔ぐ間貴殿は輕い方を擔がれよ。
成程根の方が輕くて枝の方が重いかな、それでは勿論重い方を頼んだ。
といつて巨人は十人集つても抱きされぬ樣な大樫木を、い、い、い、ウントコショと事もなげに引擔ぎ、ドシリ〳〵と地震をさせて歩いて行きます。枝の上では裁縫師が馬車にでも乘た氣持で煙草ふかしているとは何んと暢氣な男ではありませぬか、
さて愈々かなたの森に達きました。
もうよし、大儀であつた。力量の程もたしかに見屆

た、腹も空いたらう、馳走がしたいが山の中で何にもない、幸ひこゝに榎樹がある、口に適つたら遠慮は無用どし〳〵やつつけろ、といつて榎樹の枝を引き揉めてやつたはよかつたが、その手を放したとき、ピンと釣絲のやうにはねあがつた枝に釣られて、裁縫師は五六間先の岩の上にまんまと投げ落されました。うんとばかりに尻の骨をこづかれて、起にも起たれず、泣くにも泣かれず、だからといつて笑ふことはなほさら出來ず、天下の大豪傑うん〳〵と呻吟つているのを巨人は知るや知らずや、チヤ々々々、こいつは大變だ、彼奴、空中飛行の術を知つていあがる、こりあかうして居ては命が危ないぞ、桑原々々、と後をも顧ないで逃げていつて仕舞ました。さて裁縫師はやう〳〵のことで山を下り、天下を三寸の鞋にかけ、諸々方々を歷遊りながら、一擊の下に七人を斃したる大豪傑で御坐いと、到るところに吹聽いたしましたので、耳から耳、口から口に傳はつて大評判となり、遂に時の王の叡聞に達りました。王は近侍の武士に向て、近頃うす〳〵聞くところによれば、一擊のもとに七人を斃したる勇士ありとか、もしこれが眞ならんには、國家の柱石、我家の重寶、これに過ぎたるなかるへし。一刻も早く余の臣下に召抱へたきものぞ、と仰せられました。その時近侍の一人進み出てヽ、御意の如く、もし果してこれが眞ならば實に得かたきの勇夫、一議に及はず召抱へあつて然るべく候へ共、何にいたせ今は似而非英雄の跋扈の時代、輕々しく信をおくべからず。傳へ聞くこの城下に近き山中に二足の鬼、巖窟をかまへ、をり〳〵人里に出でゝは人畜を惱まし、作物を害する由、これ屈强、も

し一聲に七人を斃すほどの勇士ならば、いかてこれしき打ち得ぬとやはある、我君にはこれよりかのものを御呼びよせになりて、鬼退治仰せ出ださるゝ樣然るべく、もし首尾よくこれを果さば、その時召し抱へあるとも遲くはあらじ

と陳じました、

王もげにもとおぼされてこゝに衆議は一決しました。

さて裁縫師は王の上意をうけ、供をも連れず一騎がけにて、鬼の棲てふ山中深くわけ入りました。

をりからどつと吹き下す山風につれて、瀧の音かがう〳〵と聞えます、その瀧の音をしるべにたどり行くに、瀧の音と思つたは鼾の聲でありました。見れば眞暗に繁り合つた木の蔭に赤鬼と青鬼とが三兒の樣に、他愛もなく、大の字なりに晝寢をして居ました。

そこで裁縫師は手ごろの石を二つ三つ懐に拾ひこんで木末に登り、覘を定めてぽんと投げたる石、過たず赤鬼の眉間に的りました。

赤鬼はムックと起き上り、南瓜の樣な眼玉をクリ〳〵させて四方を見廻しましたが誰も居ませんので傍に寢て居る青鬼を叩き起しました。

おい起ろ〳〵、手前己れを打ちあがつたな。

なに己れが打つたと、串談いつちやいけねえぜ、手前こそ折角結すんで居たいゝ夢を打つ潰したじやねえか。はてなそれでは己のも夢であつたか、アハヽヽ、

二人は大口開いて笑ひましたが笑はやがて鼾となりました。

裁縫師は懐より他の石をとつて投げつけますと此度は青鬼の眉間に的中りました。

おいたゝ、人を咎めあがる僻に己れをなぜ打た。

とさらぬだに青い額に猛宗竹の樣な青筋をたて、法螺貝の樣な拳を堅めて頬ぺたの轉宿せんばかりに赤鬼の横面を一ツまいりました。打たれて赤鬼なにかは堪ゆ

べき、赤い顔を益々赤くして、

己れを打つたのはいよ〳〵手前だな、さあ如何する
か見あがれと、

いきなり青鬼に攫みかゝりました。

さあこれからは大喧嘩、喚きつ叫びつ撲ち合ひ揉み合ひ一山も揺ぎださんばかりのありさまでありましたが、暫くするうち流石の鬼等も氣根の盡たからことばりに絶息して仕舞ました。

それ見たとか

と裁縫師はそろ〳〵木から下りて來て、まんまと首を剜ね、それをもつて王の前に献上いたしましたから、王は大方ならず御恐悦あつて、さて約束通りに厚く御召抱になりました。

群書解題

源氏物語（附田舎源氏）

欲東老人

我國文學の大寶珠、實に唯一の珍として、世にもてはやす源氏物語は、いはゆる五十四帖とて、五十四巻にわたるの大部、唯にその巻數のみについていふも、亦それ多としてほこるに足る。

况んや、文章の妙、意匠の巧、兩々共に相叶ふて、皓々さながらに玉の如く、艶々あたかも花に似たる、彼れが如きに於てをや。

宜なかるかな、其珍として傳へ、奇として稱し、籍々今にいたること。

諸子、必ずやこれを知るべし。婦女の化粧品に、源氏香といふおもしろいあり。源氏伽羅の油といふすき油あ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り。定紋に、源氏車あり、源氏くづしあり。御殿女中に、源氏名あり。猶々其他、種々様々のことの上に、源氏の二字を冠むらせる、或は源氏の巻の名を、其まゝに付けたるもの、あることを。唯々、これ等のみにあらず、源氏飯、源氏そば、源氏汁粉などいふさへありしと、古るき随筆の記者、これを詳しく吾人に告ぐ。

調らべ去り、調らべ來れば、誠に驚くべきばかり、斯くまでも廣く、源氏てふことのひろがれる、皆これ其もとを、この源氏物語に發せるなり。されど直接に源氏物語より來れるにあらず、其の間にありてこれを斯くもつたへしものあり、即ち田舍源氏といふ草双紙なり。

源氏物語は、なにしおふ、國文の巨擘、名匠もこれが解に苦しみ、博學も亦これが釋に悩むもの、いかでか容易に判るべき。されば、斯くも世に博く、知らるべき筈、決してなしそを、斯くもひろく傳へたるもの、全たくは田舍源氏の力といふべし。

田舍源氏は、文政度の作者にして、其頃の六大家と世にたゝへられし内の一人、柳亭種彦が筆になる。

種彦、姓は高屋といひ、名を彦太郎といふ、江戸の士人なり。文才世にすぐれ、殊に飜案の上に妙を得たり、其作、女水滸傳の如き、或は勢田の橋の如きいづれも飜案を以て成りしもの、若し其原とせしところのものと、これを比らべ見る時は、實に其妙に驚くべし。就中、此田舍源氏に於ては、殊に然り、一部全躰の仕考より、景物風物の上に至るまで、實に實に飜し得て、妙をきはめ、奇を盡くせる、我讀む度ごとにいよ〳〵感ず。

今其一例としてこれをあぐれば、全編の主人公、光源氏の君を、光氏となし、桐壺の更衣を、花桐と直ほし、

藤壺を藤の方とかきしなど、たゞ人名位のことしあれども、實に穩當なる飜し方なり、進んでは、其の卷中の一部、夕顔の卷の如き、ことに取出でゝいふべきなり。

原本、源氏物語にありては、夕顔の卷と名し、その卷頭の歌に、

　よりてこそ、それかとも見め、たそがれに、
　　ほの／＼見ゆる、花の夕顔。

と、いとも／＼詞正しく、みやびなる風を詠しつるを、種彦は、時の俗調にこれを直ほし、

　　君か光りを、月かと思ひ、
　　うかれ出たる、からす瓜。

と、一首のざれ歌、詞は實に卑近なれども、しかも、あながちに卑俗に落ちず、またその原歌の意も損せざる、何等の妙ぞ、何等の妙ぞ、殊にその夕顔の花を、烏瓜の花と直せるなど、我その妙にいよ／＼感す。

然して又、原本には、夕顔の花を、檜扇にのせて云々とあるを、烏瓜の花を手折り、これを團扇の上にのせてと記せり。

猶々須磨の卷、明石の卷など、或はもみちの賀、末摘花の卷々など、或はおかしく、或は悲しく、一々にこれを飜し得たる、もし取出でゝこれをいへば、山鳥の尾のながき春日の、よしや軒端にかたぶくとも、更に更につきざるべし。

誠に、源氏物語そのものが、雅文界の寶なる如く、田舍源氏の一部こそは、俗文界の寶なりけり。若し、種彦の田舍源氏になほせしこと、世にあらざりしなれば、源氏物語の名は、斯くも弘くつたはらざりしや、或は知るべからず。

實に、時代を世話にくだける、柳亭種彦其人が、源氏物語に對せる功勞、決して少なきにあらざるなり。

猶々、此田舍源氏の外に、錦文流が、書きなせる、風

洗源氏物語といふあり、されど取出でゝいふべきならず。

扨また、田舎源氏が、俗界一般に、源氏物語をつたへし如く、漸々高尚なる人の間に、源氏物語を傳へたるもの、忍草といふがあり、全躰の梗概をいと短簡にかきたるもの、誠に調密なるものなり。

其他注釈本及び其他さま〴〵のことについては、次の號にていふなるべし。

家政

話のくさ〴〵

母親方へ手紙　　黄花

子供にはなるべく手紙をかく習慣をつくべし。思想を容易にあらはし得るやうになるのみならず、いろ〳〵の便宜甚だ多かり。

子供にはなるべく自ら手紙をかく習慣をつくべし。世間では大人がいろ〳〵手をいれ或は敎えて書かしむるもの多かれども、子供の手紙はどこ迄も子供らしきをよしとす。たとへ添削するも字の間違くらひのちよいとした處だけにて可なり。

西洋では子供に手紙をかく事を奨勵し朋友親族の間は勿論幼年雜誌などにもとき〴〵出さしむ。

子供の僂麻質斯

時候柄子供のリヨウマチスも多かるべし。第一肝要なるは下着の注意なり。可成汚れぬ温かきものを纒はす可し。膝などの痛むときは股引の下に毛糸の膝おほひをはめさす可し。もし大にいたむ時は洗濯曹達を湯にとかし、其部分をしばらくひたし切にて静かにこすり、よくふきてフラチルにてまけば暫らくは痛みを去るべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

暗室

子供は暗室に眠らしむる習慣をつくべし。然らざれば暗きを恐がるやうになるべし。神經質の子供には猶更暗きに眠らすこと必要なり。然るに世間大抵は便宜のため行燈或はランプを枕もとにともし置く。此は衛生上は勿論甚だよろしからぬことゝなり。暗きを恐がる子供は可成漸次に其習慣を改めしむる樣にすべし。夫につけても心なき子守など、おばけなんどの話して子供に恐怖の念を起さしむるは甚だよろしからぬことゝなれば、かたく主婦の取締るべきことゝなり。

卵

卵は子供の食物として尤も適當のものなることは今更いふまでもなく、卵のフライ、全熟卵は却て害あれど半熟卵は一二歳の子供にも最もよき食物にて、別して米との配合よろしきことは醫者の常に言ふ所なり。卵の食べ方はなるべく皿にうつさず殻のまゝ匕にてすくひ食するやうにさすべし、冷えもせず奇麗にてよろしきなり。

小兒に對する母の注意

K　N　生

小兒をもりすること

人躰は四肢脊柱により支へらるその脊柱は胎生第二月の始に於て膜樣より軟骨樣に化する機能を發し漸く軟骨に化するに從ひ膜樣背柱の背索を圍む部は軟骨組織となり第八年の頃に至らざれば化骨せず廿五年の頃に至り始めて全骨に化するものなり又肋骨は胎生の第九週乃至十一週の間に於て化骨し始むるなり胸骨は胎生の第六月より漸次發起する數多の骨核より化育し頭蓋骨は胎生第三月の初に於て化骨機能を發して軟骨樣頭蓋の後頭孔の上下二部と各側部より起る四箇の骨核も膜樣部より起る一對の骨核とより化育し五年乃至六年

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に至らざれば相癒着して一骨をなさず故にもし無智なる子守に愛兒を背にせしむるとき頭を後方に垂れ氣管を壓迫し呼吸を妨げ誤つて死に至らしむることあり又頭を前方に傾け從て身躰を前方に傾くるときは未だ骨化を生じて軟かなれば脊椎屈曲し駝背となる我國にはこの病非常に多し又老人になるも腰の曲り俗に二つになりて歩行すると云ふ狀躰となる西洋には腰の曲りしものを見ずこれ彼は小兒の時は搖籃にあり成人になるや椅子に凭る爲めならんか

小兒を養ふ室に就て

小兒を養育する室はなるべき樹木の多きをよしとす何となれば動物は酸素瓦斯を吸入し炭酸瓦斯を呼出す植物は之に反し炭酸瓦斯を吸入し酸素を呼出す故に動物は不潔物を植物に與へ必要品と交換す故に植物は吾人生躰には欠くべからざるものなり故になるべくは植物を庭園に植へよ人或は曰わん東京の如き人家稠密の處にては如何とこれ未だ一を聞て二を云はざるものなり瓦斯は瀰散機を有する所比較的多くの炭酸瓦斯あらず併し決して小兒を久しく閉込めたる室に居くべからず世の無敎育なるものは小兒を抱き劇場等の集會場所に至り長時間同室にあるあり實に誤れりと云ふべし豈に小兒のみならんや大人に於ても然り次に實例を擧げん

先年余の學友土方中村の兩氏横濱を開纜し太平洋に出でるところに至りしに暴風急に吹起り怒濤猛然船將に顚覆せんとすこの時船長は乘客をして甲板の上に上らしめず盡く一室に入らしむ爲めに氏等大に苦む併し元來同氏等は大海には慣れしを以て吐瀉する位にて苦悶を忍びしが暫くして波浪少く靜まる船長は水夫に室の戸を開かしむ室内暗き爲め咫尺を辨ぜす水夫は燭火を以て室に入らんとす燭火消ゆ再三之を試み漸く燭火を持入るを得たりとこの時乘客廿八人にて二十名は半

死四名は茫然として神識を失ひし如く四名は死せりとかやこれ何故にかゝる慘狀を呈せしかこれ室內の空氣を絕塞したるを以て人々の呼吸するは已れの呼出せし炭酸瓦斯をのみにて酸素瓦斯を吸入し得ざるによりて明かなり。

不純なる空氣は眼に害あるものとは實驗上の事實なり不潔の空氣中に棲息するものは眼病に罹るもの多しとこれ亦注意すべきなり依て室はなるべく清潔になせ窓はなるべく上部にあるを要す障子は最上部の一窓位はきりをくべし併し下部に室を作るは却て大害あり帝國醫科大學病室の頂上に窓を作りあるも空氣の新陳代謝をなさしむるためなり

小兒の養生法

小兒は寒暑に侵され易きは皮膚の關係上より見るも明かなり又往々咽喉病に罹り易きものなり特に之を患ふるの始は夜の七八時頃即ち稍々寢に就かんとするの際にあり此は氣管中に小片の假膜を生じて空氣の肺臟內に入るを妨ぐるものにして忽ち平時と異なる音聲を發するものなりし注意するにも關らずこの病に侵されしときは迅速に醫に診斷を乞はざれば大害を釀すべし又小兒は大人と異にして脂肪に乏しく腦神經發達せず血液循環も自然大人の如からず故に腦を徐々に冷すを可とす然るに世の母たるものは毛糸の如き暖かなるものを以て頭巾を製して頭部を蔽ひ冷すべきものを却て暖めいて可とす愚も亦甚しと云ふべし世俗に富貴の家に生れしものに纖弱なりといふ一概にこの言は適せざれどもあたらずと雖も遠からざる諺と云ふべし貧賤の家に生れしものは自然頭に頭布なく足に足袋なしその小兒にして却て後來名を博したるもの多し是れ血液の循環完全にして健康となり腦神經の作用も活潑となりしならん諺に健康なる躰に健康なる精神宿すと旨ある哉

飮食物を與ふることにつきて

飮食物は國の健康に關すとは人の云ふところなり世の母たるものはこの語を拳々服膺せずんばあらずもし小兒に食を與ふるのみ早きに過ぐる時はその小兒は種々の疾病を釀し萬一夭折を免かるゝと雖も羸弱の身となり業に就く能はずして僅に露命をつなぐのみ不快の極點と云ふべし故に玆に一言せんとす

小兒初生より一ヶ年は乳を以てせよその乳を與ふるとき猥りに乳を與へ泣くも乳房笑ふも乳房と乳を多量に與ふるときは小兒の口より乳の逆流することあるは屢々目擊する處なり必ず出來得る丈け節制してその度を超へしむべからず併し吾人の吐瀉するとは大にその意義を異にす故に逆流すとて非常に心配するには足らず何となれば小兒の胃は德利の如きも大人のは然らず胃底に物停滯するを以て吐瀉の時苦痛を覺え小兒の乳を吐くとは德利を倒になす如し故に苦痛なし然れども之を屢々なすときは習慣となるを以て注意して乳を與へられよその外に他物は決して與ふべからず一ヶ年間は未だ消化軟弱なればなり次に粉質の食物を小量に與へて乳に代ゆるの法をとられよ以後三ヶ年は善く調理したる消化し易きものの小量に鷄卵を混じたるを食せしめよ鷄卵は營養となる蛋黃白殊に味美にして消化し易し熟煮したるは消化し難し生卵は煮熟したるものに比すれば消化し易しと雖も最も適當なるは半熟なり次に第三歲より第五歲迄は肉類を小量に與へてかなり十歲に至れば大人の食と同じ只その量を異になす凡そ十歲の男子は婦人の半量をとり十四歲にして婦人と同量を食すと

小兒の天性を害する不可なることに就て

彼の無智なる下婢等が小兒を愕かしめ怪物又は盜賊の如きことを話し脅嚇することは愚の甚しと云ふべし劇しく恐怖する時は神經過敏となり或は眠に就かず又は

夢に魔はれ終に精神の痲痹を發する等その健康上に及ぼす弊害擧て數ふべからず我が國にては恐怖心を以て小兒を養育する方便となす如し是れ天性を害するの大なりと云ふべし今にして之を改良せざれば日々臆病者を出し臆病にては支那人も三舍を避くるに至るかと余は信ず何故に然るかと云ふに我が子守歌をきくに「子ンチココロリココヤマノコナクトオニニクワセルヨ」との歌をきく小兒は世に鬼あることゝ信ずるに至り益々恐怖せしむ故に生長するに從ひ大に恐るゝことあり例令ば山中を通行し木の葉の風に飜るを人の逐ひ來るかと信ぜしめ松根を見て馬か牛かと想はしむこれ全く精神に恐怖の念あれは也希くは世の婦女子よ是等の弊を一洗し今の婦女子は盡く將來の孟母となり我が國光を一層耀かしめ劉覆餌の所謂その外を金玉にして其後を敗絮になすの歎きなからしめよ嗚呼世の婦女子の責任も亦大ならずや誠に彼の雷鳴を天下に轟かしたる「ワシントン」を見よ彼は十二歳の時「ガーフエルド」は嬰兒の時に於て父を喪ひ慈母の家庭教育の然らしむるにあるものなり余の此の注意を記す豈に偶然ならんや願くは一讀あらんことを

庖厨雜爼（其三）

恕哉

(7)魚類の砂糖漬

我國にては魚類を貯ふるには重もに鹽漬け或は乾物となして蓄ふることとなるが外國にては薫魚の法あり（此法は近來餘程我國にも行はる）且つ砂糖漬の法を行ふこと多し其法は先づ魚類の臓腑を拔きて内部に砂糖を散り懸けその砂糖のよく肉にしみ込むために之れを平らなる場所に置くこと少時間なるべしさすれば久しくその原味を失はずして殆んど鮮魚と異らざるの風味を保つものなり然し砂糖は成る丈け混和物の少なきを良

とすれば三盃白を以て適當とし而して其分量は魚の目方凡六百目に付き食匕一杯位の比例を以てよしとす

(8)鹽魚の調理

先號(5)に於て鹽漬物の鹽分を去る法を述べしがその方法はやゝ面倒の嫌ひあれば爰に又た一層簡易の仕方を陳ぶべし先づ其鹽抜きせんと欲する魚類を一度水にてよく洗ひ而して清潔なる奉書紙に包み清水に浸し置くべし左すれば至極簡單にして且つ味も變ることなく鹽分全く去りて矢張り鮮魚の如き調理法を行ふことを得べし

(9)白米の貯法

白米は玄米に比してよく虫の附く患あるものなり俗に其虫害を防ぐ方法として鹽を投入するものあれども鹽には幾分か水氣を含むものなれば白米稍ゝ膨脹の傾きありて爲に其味に變化を來すことあれば面白からず依りて左に最も簡單にして功力ありて害なき一二の方法を示さんと欲す

一法には白米のうちへ南天の枝を葉の附きたるまゝ挾み入れ置くべしさすれば決して虫害を受くることなし殊に餅米には最も妙功あり又た一法には煙草の葉三四枚づゝを白米の俵若くは米櫃の內へ挾み置くなりされば一年や二年は大丈夫虫の附く如き憂なし簡易の法なれば試み玉へ東京の如きにては二斗や三斗宛小買ひするの風あれば白米に虫の附く間もなけれども地方の大家などにては梅雨抔には隨分米虫の害に困るものなれば宜しく此法を行ふを宜しとす

指と紐（西洋手品）

手品とは手先にて行ふ戯術の意なり、英語にて之れをSleight of hand と呼ぶも亦た同意にて器械仕掛を用ゐず唯だ二手と十指の內に奇術を弄するが本義なり、有を無に化し虛を實に變じ、出たるを沒し隱たるを顯は

し、これと見ればかれ、彼と思へば此れ、巧に衆目を暗まし出沒變化窮まりなく如何なる物識といへども啞然としてその爲す所を解し得るものなし、されば古昔印度、埃及、希臘、羅馬等の宗教に於て僧侶が儀式上に之を使用し以て愚民を欺き信仰の方便となるや、妖術、魔術、幻術等と稱し恐れ慄きたるものなり、今も尙ほ英國にては詐僞の手段邪教の方便として奇術者を賤しむるもの丶如し然れども一度その裏を見て術を知る時はたはい無き詐術に依るもあれど學理を應用したるも中々多くして趣味に富んだるも夥多あるなり、玆に今英國に行はる丶手品の簡易にして仕掛を要せず誰も容易に爲し得るものを逐次拔錄せん心なれば讀者幸に家庭の遊戲として試み玉ひね、

◎魔法の紐

こは我國にて指切と稱するもの丶一種なり、先づ鯨二尺許の細き紐を取つてその兩端を結ぶべし、この紐の一方の輪を左手の大指に掛け、掌上に綾を取つて無名指と小指の間に挾み、小指の後に垂れたる輪を前に持ち來り、綾の下を通して後より食指に掛け、又その餘を後より大指に掛け、而して再び前より食指に掛くれば、即ち圖の如くなるなり、かくなし終らば大指に掛る二個の輪を前に引緊め、大指より外して中指と無名指の間を過ぎ手の後に持ちゆくべし、此時指の根本を横切る紐を前に引かば、紐は總て指より離れ去るなり



◎老爺さんと椅子

前に用ゐたると同樣なる紐を取つて中指と無名指をその一端の輪に掛け、一方の紐を以て食指を廻らし、又一方の紐にて小指を廻らし、右手の小指と食指を各左手の小指と食指を括りたる紐の中に銜き入れ、前に引出して二個の輪を造るべし、(第一圖の如く)それよ

り圖の示す如く二個の輪を夫々中指と無名指の上より後に持ち行き、その二指の後を横切る紐の下に押し通して引緊むべし、これにて準備全く整ひたれば、奇術者は左の如き口上を述べざるべからず



第一圖

東西、これは老爺さんが蠟燭四本を盜みまして釣り下げて行く躰で御坐います、此の指がその蠟燭で御坐います

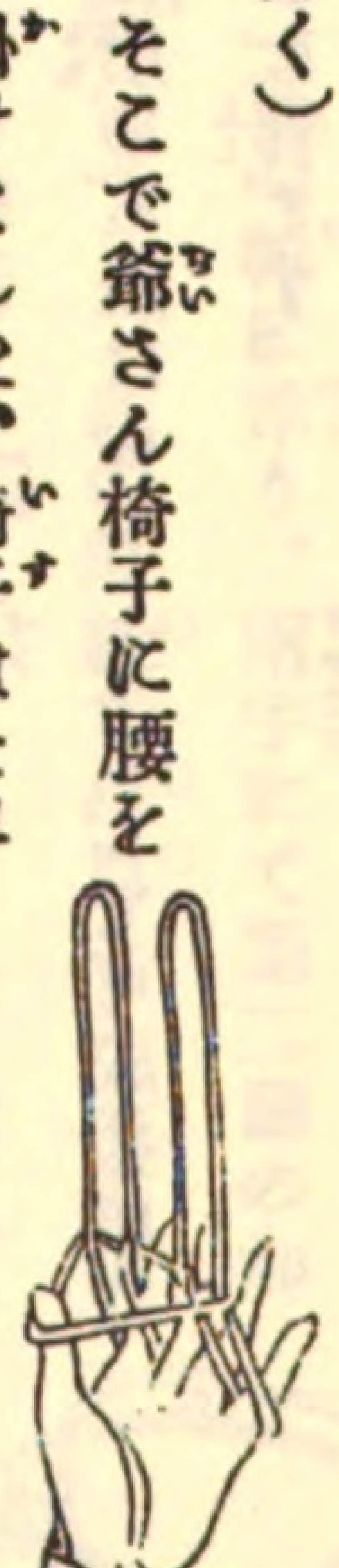
かく言ひ終はりたらば、中指と無名指の脊を横切る紐の下に右の食指を入れてゆるやかに引出し、中指と無名指を通し前に持ち來るべし、(第二圖の如く) 奇術者は又次の如く言はざるべからず。



第二圖

これは蠟燭を木の枝に掛けた躰で御坐います、爺さんあんまり急いで來たものですから疲れたと見え道傍の木に蠟燭を掛けて暫らく休むので御坐います

其時奇術者は長く垂れたる輪に大指を掛け、中指と無名指の脊を圍む紐に、右の食指と中指を差し込み、引出して夫々二指の上より前に持來り、掌上に直立せしめ、又大指は可成的掌の中央に引寄すべし (第三圖の如く)



第三圖

そこで爺さん椅子に腰を掛けました、椅子はそれで御坐います

この時大指の輪を外して(第四圖の如く)左の如く言はざるべからず。



第四圖

老爺さん善い心地に成つてこゝに休んで居りますと、その內に日が暮れて參りまして、眞暗になつて仕舞ひました、そこで此の蠟燭に燈火をつけるのには鋏が要ります、鋏はこれで御坐います

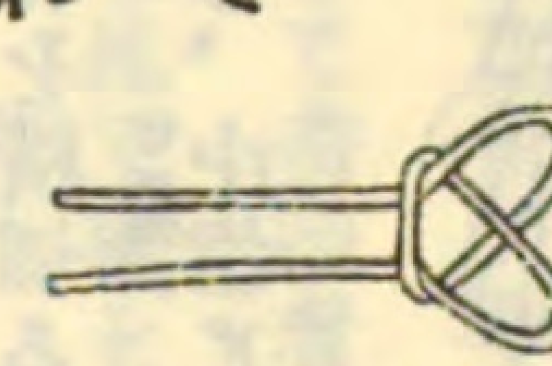
奇術者はこれと同時に鋏の齒と柄を動かして恰も物を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

切るが如くすべし。

老爺さんが丁度蠟燭に火を點けますと、彼方から角燈を提げた巡査がコツコツ靴音立てゝやつて來ました、

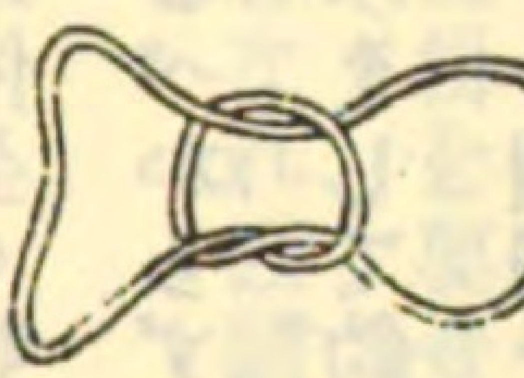
左の小指より輪を外して前に引くべし（第五圖の如く）



第五圖

老爺さん暫の間は巡査と爭ひ揉み合つて居ましたがとう〱巡査に組み伏せられて、此の通り兩手を縛られてしまゐました

此時急に右の中指を外し（第六圖）の如く爲して次の如く言へ、



第六圖

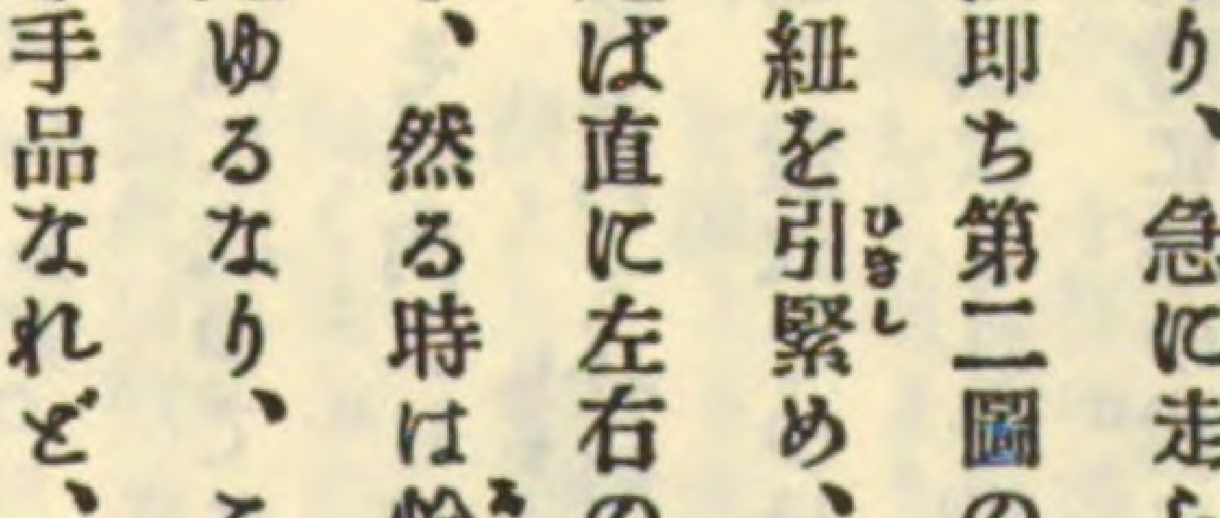
可哀さうに、老爺さん蠟燭を盜んだ許に、苦しい牢屋の身と成つて仕舞ひました、皆さん悪い事は決して出來ませんものです。

◎右手を近づけずして左の手首を結ぶ

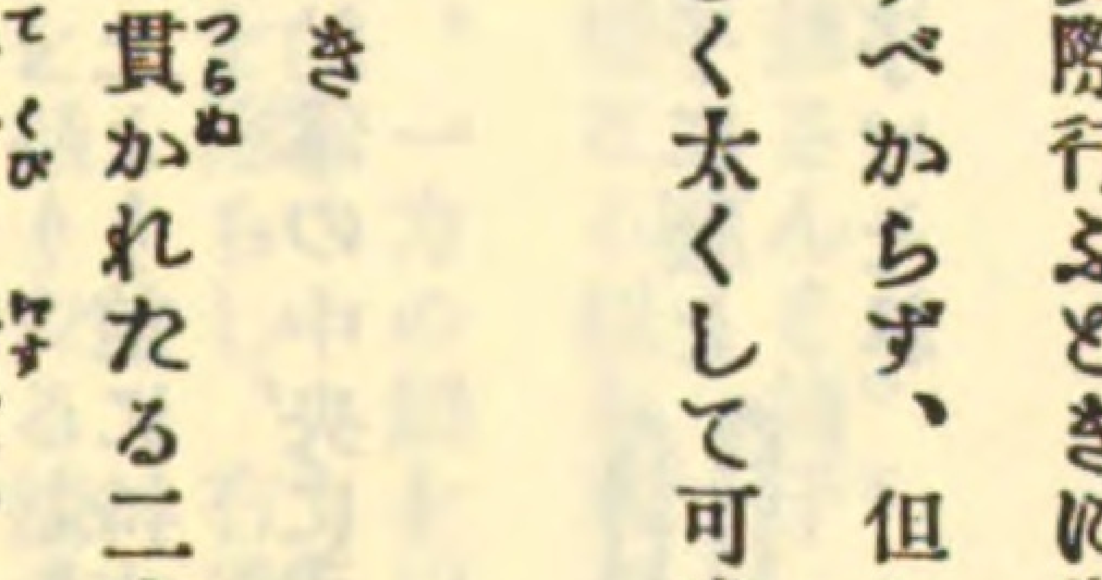
紐の兩端を持ち、右手を動かして第一圖に示す如く上方に向けて輪を作り、急に走らして輪を左の手に掛くれば即ち第二圖の如くなるなり、此時前後に紐を引緊め、手首の固く結ばれたるを見ば直に左右の手より紐の兩端を棄つべし、然る時は恰も兩手にて結びたる如く見ゆるなり、之は最も容易にて又手際よき手品なれど、勉めて敏速ならざれば面白からぬのみならず忽ち觀破せらるべし、されば勿論實際行ふときに當つて圖の如き輪形を示すべからず、但し此の伎に用ゆる紐は少しく太くして可成柔軟なるを善とす。

◎手鎖ぬき

圖に示す如く互に貫かれたる二本の紐を以て、甲乙二人の手首を結び、それを解かずして拔き去るの法は次の如くすべし。



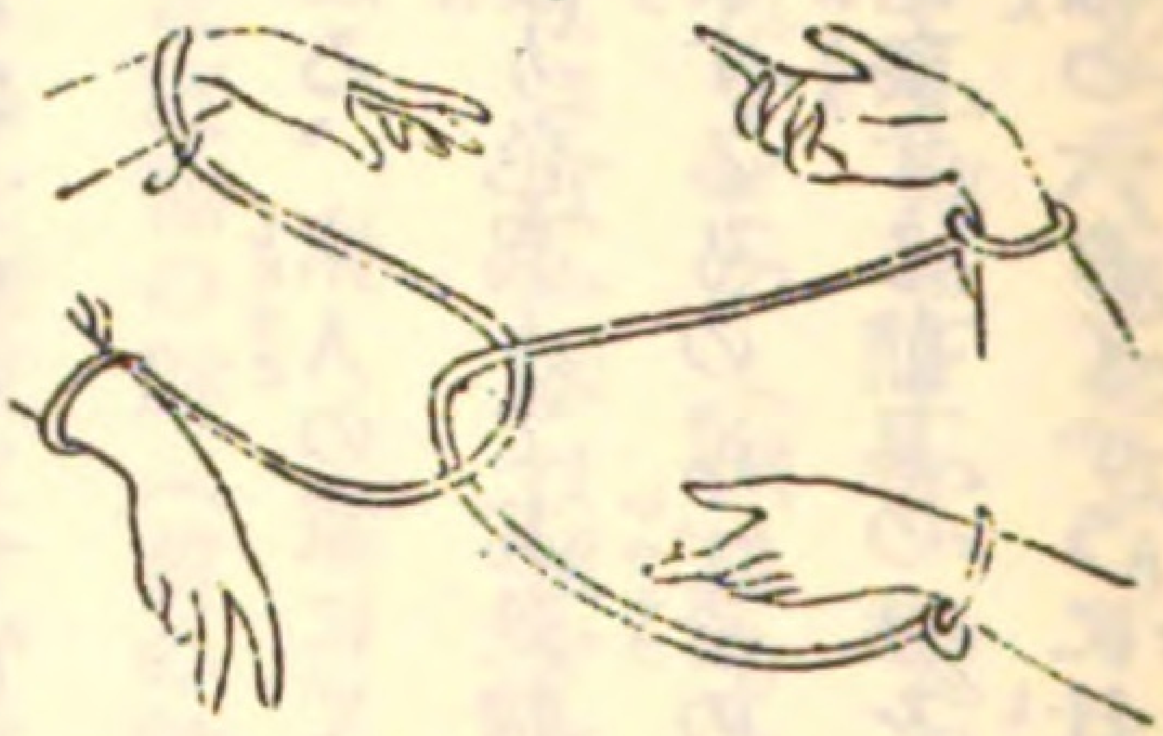
第一圖



第二圖

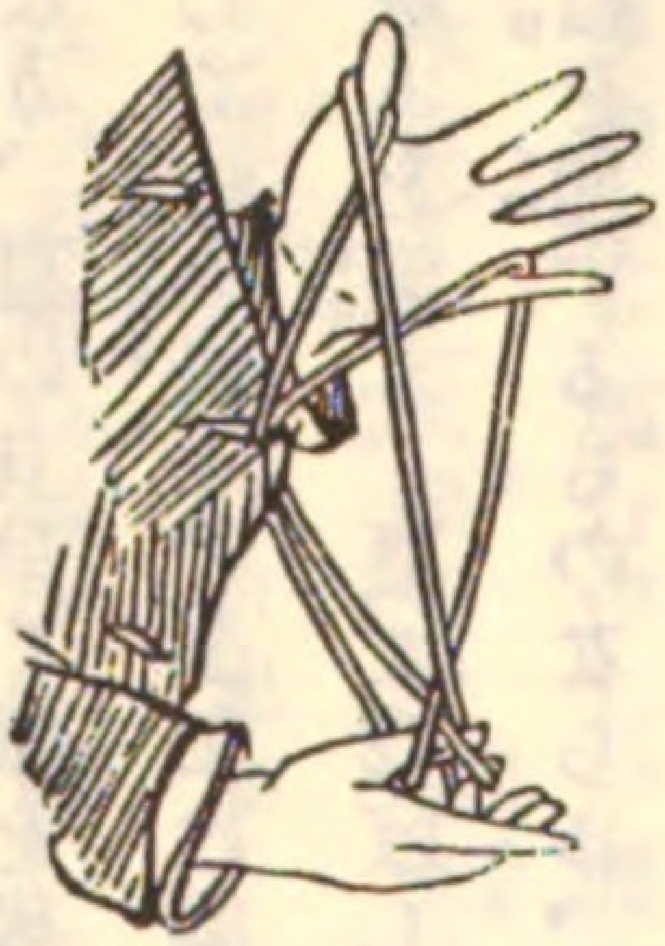
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

甲の人の紐を乙の人の手首を結べる紐の下に通し、それより乙の人の手を越して甲の人の輪を外さば直ちに此方へ拔き去り得べし、此の紐を同じ法により逆に戻す時は、再び元の如く彼方に箝め得べし。



◎釦鈕の穴から紐を拔取る法

長さ二尺許の紐を取つてその兩端を結び、上着の釦鈕穴(和服なれば襯衣の袖口にある穴)に通じ、上下の輪に夫々左右の大指を掛け、次に右の小指を上の輪に、左の小指を下の輪に互違に掛けて引張れば圖に示す如く紐は實に釦越の穴を貫く樣に見ゆべし、それより左の小指と右の大指を弛め、急にその二指を外して左の大指と

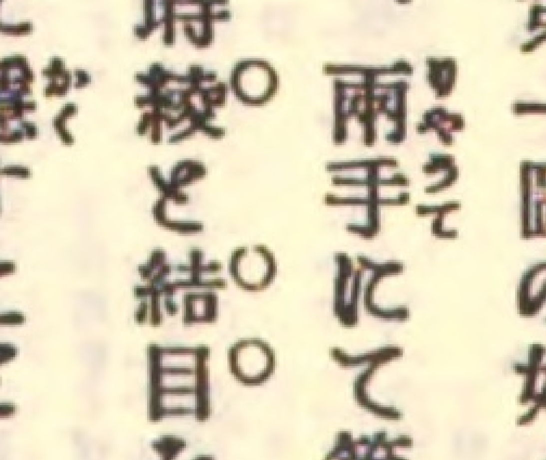


右の小指を引く時は紐は容易に穴より拔け去るものなり。

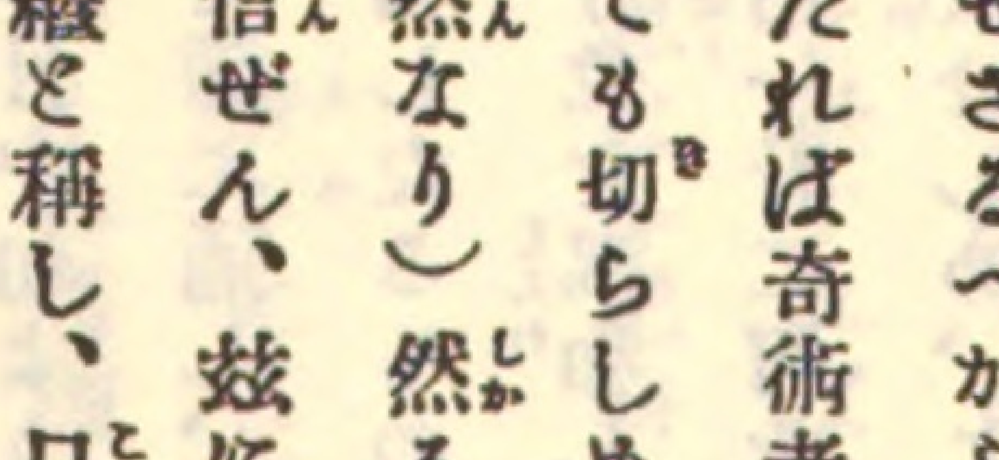
◎切りたる紐を口中にて繼ぐ

紐の兩端を結び、第一圖の如く綾に取つて二重の輪に作り、兩手にて第二圖の如く持つべし、此の時綾と結目を一所に集めて右手の指の内に隱すことゝ、紐の左手より右手に至るの間は上部を短くして下部を長く垂らすことゝに注意せざるべからず、これにて準備全く整ひたれば奇術者は觀者に乞ひて紐の何處にても切らしめよ(觀者の上部を切るは自然なり)然る時は全く二分したるものと信ぜん、茲に於て奇術者はこれを齒にて繼と稱し、口中に入れて動かし、暫して口の外に出すときは長さに於て幾分を減じたるには氣付かずして正しく口中にて繼ぎたる

第一圖



第二圖



ものと思ひ、驚き怪むべし。

牽牛花の培養

牽牛花は誠に家庭によきものなり、夏の旦早く眠を覺せば數々の色忽ち惰眠をさまして心氣快く、夕には凋めど來る朝には新しき姿にて家人を迎ふ、夏に喜ばしきは朝の冷氣と牽牛の花こそ指を屈するものならめ、且つ花のみ美なるにあらず、其葉も麗はしく之がため大いに庭の躰裁をも調ふるなり、古き壁古き垣根などの見すぼらしうなりたるものに、牽牛花を這はせなば、相點綴して一層の趣を添ゆべし。

而して牽牛花の培養は他の花物と違ゐ、素人の家にても容易になし得られ、また年々品變り色異りて其景情最も變化し易きものなれば之を培養するものは一層の樂となるなり、次に素人の家にて培養する簡易の法を記さん、但し初心なれば成るべく輪の大きくやうに仕立て、また葉の小く蔓の細きを賞すべし

◎土質及肥料水　溝底の泥土若しくは芥土の能く腐敗したるものを取り本月中旬より下旬にかけて之を十分日光に曝し粉碎して篩に通し、之と同量に極く疎なる土を混和し、此混和したるものと、脫水に利便ならしむるため川砂の四分位を混和し以て培養の土質となすべし、肥料水は油粕一升に河水一斗混和の割合になりたるものを能く腐敗せしめ、これをば其用となすかた上策なり。

◎播種期及播種　新曆四月上旬より中旬にかけてよし、播種の方法は適宜の植木鉢に小石若しくば貝殼を入れて脫水を自在にして其上に培養の上に綿密に塡め其地面に二分位の穴をあけ、種子の臍のある方を上にして二粒宛埋け置くべし、其上に細い河砂をばら／＼とかけ置くもよし。

◎鑑色及育苗　十分生長したる後如何なる色の花が咲

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くべきかは二葉の内其莖にて判斷のつくものなり、大抵莖の色が赤なれば赤とか、桃色とか柿色とか、莖の色青なれば瑠璃色とか紫とかを顯はすとの（例外もあれど）なれば、幸に二粒とも發生なさば一本は拔ぎ去るを便とす。

◎移植及灌水　蔓五六寸に延びなば他の鉢（前の鉢よりも三倍位大なるもの）に移植するを便宜とす、其鉢の底には小石と若しくは貝殼等を敷き、其上に細末の干鰯と河砂とを混和したるものを入れ、其上に培養土を少量敷き其四方には同じ培養土を塡むべし、灌水の法は河水を以て第一とし池水など之に亞ぐ、井水は宜しからざれば、河水に不便の家庭にては日光に曝したる宿水を用ゐて宜し、灌水の度數は毎夕一回にて宜しけれど極暑炎天の候には日中一回灌水して差支なし。

◎支柱及旨花　「朝顏に瓶釣とられてもらひ水」とある如く牽牛花は誠に可弱き草花なれば成るべく他物に身を托せんと欲す、されば其生長を助くると、其美觀を欲するために支柱をこしらへやるべし、鉢の上に竹の少く割りたるものか、葦にて行燈形か、櫓形に製すべし、而して蔓之に纏綿して適宜の長さに至らば、五枚若しくは六枚目の葉以上の蔓先を摘み去り、後に葉の股より出づる蔓三筋の生長を計るべし、併し蔓三尺にも至らば遠慮なくすべて其蔓先を摘み去るべし、蕾をつくるに至りても一つ隔てに摘み去るを上策とす、これは花の大輪なるを欲すればなり、而して花咲き始めて存外小輪なりと思はゞ肥料水の量を増すを要す、必ず効顯あり。

◎入谷百草園丸新　府下に名高き牽牛花の各花なる同園の朝顏培養法に曰く◎播種の時期は四月中旬を度とし、地所又は鉢の中など隨意なり、芽出て中葉三四枚に至りし頃、屎二分へ水八分の割にし交ぜ一度か二度

か二度位やるべし、◎葉五六枚を出せし頃、心芽を摘取るべし、其時、葉の間に生したる枝芽の中にて一番大りたる芽を殘し置き、餘の芽は皆かきとるべし、夫より生長するに隨ひ莟だけを殘し枝芽はなるだけ摘み捨つるを宜しとす◎肥料は屎三分水七分の割合にて二日置位に跡々永くやるべし夫より手をたて蔓をからませる支度を調ふべし◎花開く後も枝芽は常にかきとるべし、極大輪に咲かせんとならば、莟十二三位をつけ殘して心先を止むべし、花普通なれば莟二十位つけ心先を止るものとす、但し後の控のために枝芽一つは殘し置くを宜しとす、右の方法にて眺め行かば秋季までも其樂は盡きざるなり云々。

未だ春寒料峭の候にて、牽牛花の時節には早けれど、培養土の準備はこれからにて播種時期も來月なれば斯く豫め概略を記し置きぬ。

雜　録

稻葉一徹（口絵のゑとき）

織田信長、美濃の齋藤を絶滅し其遺臣稻葉一徹を召して仕へしむ、然れども尙ほ其異心あるを疑ひ一夕茶に托して茶室に招き、事宜により刺殺し去らんと欲す

一徹來る、勇士劍を懷にして座にあり、機によりて正に事を發せんとす

信長外に在り佇立して室內の動靜を覗ふ、事未だ發せず、却つて朗々の聲あり、同志默聽するが如し

一徹の座に來るや、二勇士は壁間の一軸を指し其解説を求め、其隙に乘じて志を貫かんと企てぬ、一徹輙ち立ちて『雲横秦嶺家安在、雪擁欄干馬不前』とある韓退之が佛骨を迎へんとする時の帝を諷諫して

忌諱に觸れ遂に潮州に謫せられし途中の感慨をば、辨辭流るゝ如く、語氣迸るが如く、解説終局を知らず、二勇士感に入り醉心地にて謹聽し、其初心を忘却せしものゝ如し

始め信長障外に在りて二勇士の躊躇大事を發せざるに焦心苦慮し、倘は一徹の辨辭を默聽す

唐突障を押して入るものあり、これ信長にして忽ち懷中より匕首を出して事情を明にし、此の名士を失はんとしたる疎忽の罪を謝す、二勇士齊しく匕首を投す、一徹笑つて、我も豫め此事あるを察し、凶器を抱きたりと、懷中より匕首を示す

信長益々一徹が文武兩道の士なるを感じ、終に疑なきに至れり

社交一斑

幣制改革と流行物

流行子

日本國も愈々幣制を改革し金貨本位となつてはもう世界に肩身が廣くなつたが、それにつき兌換銀券廢せられ五十錢二十錢十錢の銀貨と五錢の白銅と二錢一錢五厘の銅貨とにて四圓九十九錢五厘までの計算を爲さゝるべからず、さればこれにつきての影響は五錢以下などの商賣は僅に二厘三厘の勉强し競爭し來つたものが、五厘勉强せねば勉强とならず、これにはちと困れどこれからは物の價は平均さるれど品物か又は景物を添するとかにて勉强の手段となすならん、二厘錢、一厘錢、一厘五毛錢天下に通用なきに至つたれば姫糊を買ふにも困るし、乞食も困るし（五軒を歩いて一軒て五厘貰ふより一軒五厘宛の方確實なれば）托鉢坊主も困るし其他にも多少差支あらんが、幵は社會上の問題に屬し機會を見て觀察すべけれど、先づ第一に流行界に影響を蒙るものは錢入の改革なり、これまで二十錢五十錢一圓と紙幣を蔵むる用にしたる紙入なるもの行はれしも、これから信玄袋の如き銀貨入が主位を占むるに疑なからん、幣制改革につき錢入も新奇なるもの出で來るべければ追々報道しまゐらせん

内職案内

製藥の補助

こは木挽町八丁目壹番地大日本製藥合資會社に於て募集する女工の職業なり、今同社に就いて其の一班を聞くに、女工の課業に二種ありて、一は技手及び本職の業務を補助して、器械を整へ、藥罎を洗ひ、又は諸器具を持ち運び雜用を便ずる等の仕事を營むものにて、他の一は全く藥種の製造に關係せずして、唯だ出來上りたる藥罎を整理して、之に紙を貼り或は之を箱につむる等の仕事を執るものなり、されば後者の職業は恰も活版所の製本裝釘課が少しも活字に關係せざるが如し、然れども兩者の職工共に專務とする部門ありて各受持つ處を營むものとす、十歳以上の婦女は誰にても市内に一名の保證人さへあらば、直ちに傭はれて相應の給銀を得らる可けれど、極めて新參にて未だ藥の取扱ひ方も知らざる時、即ち見習を要する内は僅かに一日の所得十錢内外に止まれど、よく諸種の方法と技術を呑み込むに至れば、拾八九錢を得る容易なりといふ

左に應募者の便宜を計り、數種の事項を述べ置くべし

（一）同社の事業は午前七時に始まり、午後五時に終はる事。

（二）日曜大祭日は休業の事。

（三）正午より三十分までの喫食時を休憩時間とする事、但し辨當自辨當日携帶の事。

（四）始業中は雜談喫煙を固く禁ずる事。

（五）勞作中は同社にて給する仕事着（洋服）に着改ゆる事。

（六）何事も總て技手の命令に從ひ、藥種の取扱には注意を怠るべからざる事等。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○小兒○

はよく肥へて笑ひ顏の愛らしき筈のものなり瘦せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる

スコット乳菓

が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虛弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に**虛弱なる婦人**は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○

は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を瘦せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萠芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる**スコット乳菓**は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を強くして活力を與ふること實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が**嬰兒、小兒**及虛弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を增し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の說明書御入用なれば橫濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舗にて賣捌き居れば御購求ありたし

橫濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	鳥居德兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田清右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎

博文館新刊廣告

依田學海翁著
小御門

全壹冊　正價金八錢郵稅二錢

依田學海翁深く世相に感ずる所あり、時を慨するの氣象は、鬱として萬丈の虹霓となり、筆端常に烈士節婦を傳し出して稜層の氣氷雪亦啻ならず。就中南朝式微の貞臣を傳するもの前後二數、小御門即ち藤原師賢卿の其身を犧牲にして、帝を擁護せし忠節の如きは、蓋し秋霜烈日千古不磨の意氣、加ふるに氣が謹嚴なる文は、事を叙して頗る崇重、國民たるもの宜しく一讀すべきなり。附錄の辨内侍、尹良親王亦南朝の傑物、讀者請ふ愛讀せられんことを

作文演說良材

澁江保君編（製本既成）

世界格言大全

全壹冊洋裝　總クロース金文字入　紙數千三百八十頁　用紙精良印刷鮮明

正價金六拾錢　郵稅六錢

格言俚諺は以て與るべく、以て鑑むべく、特に作文演說の絕好資料たるべく、立身處世の最良指針たるべし、本書は古今東西各國に於ける格言俚諺を網羅して遺すなければ、兼て萬國の風俗民情をも攻察するに足るべし

立志處世錦囊

後凋生小倉秀貫君著
加藤清正

全壹冊二百餘頁　正價金拾錢　郵稅四錢

猛然朝鮮を蹂躙しては、鬼上官と恐れられ。其擒にせる二王子を還しては、入道をして慈仁に感泣せしむ。絕代の英雄藤肥州、死して百世に廟食するもの。亦宜也。この書公の性行を描きて面目卓然、髣髴として神の如きを望むの感あらんとす

福地櫻痴翁著
三人武士（忠孝義烈）

全壹冊正價金八錢郵稅二錢

三人武士は櫻痴翁得意の好題目勇者の面目躍如たり其文其想淡中美味あり妙云ふべからず

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（明治廿五年九月十四日遞信省認可）

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA